

下級巡査の場合を考へて見ると、一週十七圓の俸給と六圓の戦時手當で合計二十三圓の收入であるが、戦時の今日は最劣等の労働者の賃金にも遙に及ばない、軍器職工は申すに及ばず日傭人足でも一週三磅や四磅の収入はある、夫れに勤務時間が非常に長いと來てゐるから巡査の不平は決して無理からぬ事であつたのみならず彼等には今一つの大不平がある、夫れは彼等が半ば軍隊的の官吏である爲めに他の職工や労働者のやうに同業組合の組織を公認されてゐない、従つて不平や苦情を持ち込んで自分の主張を貫くべき機關がない、此缺陷を補ふ爲めにテイ・チーエルなる一巡査が率先して「巡査看守國民組合」と稱するトレード・ユニオンの團體を組織してゐるが、政府は之を一種の俱樂部やうのものと認め、合法の團體機關とは認めて居らぬ、加ふるに前記チーエルなる巡査は近頃職務違反の廉を以て免職されたので不平は一層火の手を高めたのである。そこで今回の巡査側の要求は左の三箇條である。

- 一、現在の一週十二志(六圓)の戦時手當を一磅(十圓)に増し之を平時俸給に加へて年金付きのものとし、外に俸給手當の一割二分五厘に該當する戦時賞與金を支給さるべき事
- 二、巡査看守國民組合の「倫敦同業組合幹部」の一員たる巡査テイ・チーエルの無條件復職

を求むる事

- 三、上記「巡査看守國民組合」の公認を求むる事

右第二箇條にある「倫敦同業組合幹部」なるものは一般同業組合の聯合會本部にして巡査組合とは何等の關係なかつたのであるが、今回のストライキに於て全然巡査側の主張に同情を表して之を援助したのである。

査公要求の一部は裁定せらる

以上の要求條件に對し首相ロイド・ジョージ氏は内相ケーブ氏、軍事内閣員スマッツ將軍、軍器大臣チャーチル氏等と共に巡査側の代表三名(チーエルを含む)とドーニング街の官邸に會見した結果、即座に左の如き裁定を與へた。

- 一、各級を通じて一週十三志(六圓五十錢)の増俸を行ひ年金附最低給を一週四十三志(二十圓五十錢)となす事
- 二、一週十二志(六圓)の戦時賞與金を與ふる事

- 三、子供加俸一週二志半、寡婦年金一週十志を與ふる事
- 四、無條件にてチエール巡査を復職せしむる事
- 五、巡査團體を代表すべき適當の機關を設くる事

但し右のうち巡査代表機關設置の件は普通の意味に於けるトレード、ユニオンの組織（勿論ストライキの権利を含む）を公認する譯ではない。右會見後内相ケーブ氏が新聞紙に公表したる處によれば首相は巡査代表者に向つて愈々警察官の特殊なる位置と國家に對する職責とを説き例を露國の現狀に引いて露國が今日の狀態に陥つたのは主として軍隊内に委員制度の機關を設けた爲めである、英國は斷じて露國の轍を履むことは出来ぬ、仍て警察官に普通のトレード、ユニオンの團體は許さないが苦情を上官に持込むべき或種の機關を設くる事は賛成するといつたのである、此意味に於て巡査は凡ての要求を充たされたとは云へないが先づ此邊で折合をつけるより外はなかつたのであらう。

首相會見當時のドーニング街は數千の常服巡査を以て填められた、倫敦の巡査は體格の美と人相の類似とを以て有名である、夫にキチンとした制服の着振は倫敦美觀の一つである。

ろがストライキ中の彼等の平服姿は氣の毒なほど見すばらしい、色褪めた背廣に舊式の山高帽、中には瘦せこけた子供を伴つてゐる者もあつた。當日無警察の倫敦は諸官衙の門衛に銃劍番兵を用ひスコトランド、ヤードの警察本部の正門は固く閉ざされて庭内に小隊の武裝兵が屯してゐた。車馬輻輳の辻々は巡査の指圖なしに定めて混亂を極めるだらうと思つて一二の場所に見物に行つて見たが長い間の教育のせいか電車も自動車も馬車も人足も自分で右側左側を合點して殆ど何等の事故なしに夥しいトラフィックが行はれたは慥に一つの奇蹟のやうであつた。勿論「スペシヤル、コンスタブル」と稱する例の有志巡査（多くは一廉の紳士）は悉く狩り集められて晝夜辻々の立番をやつたのであるがストライキ巡査は彼等に對しても銃劍番兵に對しても少しも悪罵や無禮をしなかつたのは遠に平素の訓練の然らしめる所だと新聞は賞め立て、ゐた。首相會見を終へて委員がドーニング街を引上げるや否や數千の巡査團はタワー、ヒルと云ふ處に大會を開いて委員の報告を聞き一同萬歳を連呼して解散し即刻着換の爲めに各々家路についた。例のチエール巡査は一同に胴上げされて何とか云ふ附近の警察署に運び込まれたと云ふ話である。巡査ストライキに對する倫敦市民の感想は同情と

憤怒と相半ばしてゐた。開戦當時ならば怪しからん非愛國態度として其顔に唾したかも知れんが戦争も早や四年も續いて見ると戦時が却つて常時のやうになつてストライキも雙方の主張の是非曲直を冷靜に判斷して賛否を表すると云ふ餘裕ある状態になつてしまつた。

(一九一八、九、二)

資本徵發論

今日となつては何時戦争が終るかの問題は左程に大切でない。どうせ平和が調印されたにしても其翌日から世界の戦時状態が一變する譯のものではない、物價が暴落して急に生活難がなくなる譯でもない、戦時の變調状態が全然戦前状態に復舊するまでには五年や七年は少くともかゝると見て置かねばならぬ、所謂戦後の改造問題は其性質上到底短日月で解決されるべきものではない。此改造問題に最も銳意せる英國の例に徴しても除除されるべき兵士の就

職口が保證されてゐる分が既に六割三分の高率を示してゐると云つて喜んでゐるが、残りの三割七分は何うして生活を保證するか、是れは兵士丈けの話であるが、其外何百萬と云ふ軍器職工や女工やを何うするか、又何十萬といふ癩兵の處分を何うするか、労働問題は戦時の今日より數倍の紛糾複雑を加へて、社會の不安状態を齎すべき虞がある。アヂソン博士を首腦とする英國改造省の日夜没頭畫策してゐるのは實に此點である。

其外戦後の大問題として財政整理の問題がある。恐らく戦争の終りまでには英國の國債は百億磅(現在六十億磅を超えてゐる)若くは夫れ以上にも達するであらう、此莫大の國債を如何にして償還するか、此の利子を如何にして仕拂ふか、年々五六億磅の利子を各種の増税で仕拂ひつゝ、永く子孫後世に負擔を貽すよりも寧ろ此際内國債の棄却(一名國富沒收又は資本徵發)を斷行しては如何といふ説も眞面目に唱へられてゐる。數月前此案に對する政府の意嚮を質問された時藏相ボナー、ロー氏は資本徵發は學說として立派に成立し得るが政府はただ實際問題として之を考察する場合に立つて居らぬと答辯した。學說として立派に成立する案ならば場合によつては斷行されぬとも限らぬ、要は利害の比較問題である、齒痛に苦しむ

人が思ひ切つて其齒を抜いてしまふか、夫とも姑息療法で年中苦痛を忍んで行くかの決心問題である。近刊のヒチック、ローレンス氏の資本徵發論によれば現在の六十億磅の國債は英國民各自の財産の平均二割八分を沒收すれば償還し得る、勿論財産の程度に應じ懲發率を異にせねばならぬ、氏の提案によれば一萬圓の財産ある人からは僅に九分十萬圓の人からは二割六分、百萬圓の人からは四割四分、而して其上の大富豪からは六割二分を懲發すべしと云ふに在る。一時は非常な大打撃大苦痛を與へるにしても例へば火災に罹つて財産の半を失つたと思へばよい、所謂焼太りで數年のうちに損失を挽回することが出来よう。英國の富を以てして是位の一時的犠牲を忍び得ない譯がない、若し一大勇斷を以て之を實行すれば現代の産業も子孫の幸福も二つながら之を完うすることが出来ると論じてゐる。(一九一八、九、一三)

獨逸に課すべき償金

列國は強慾の債權者でありたくない

聯合國は米國の手前を兼ねても思ふ存分の償金を獨逸に課するとは出来ぬが、併し實際此戰爭によつて受けさせられた損害にして數字を以て計上し得る性質のものは、之を戰敗國の獨逸から徵發することの正當であるとは追のウキルソン氏と雖も夙に承認してゐる。この償金には二種ある。懲罰的のもの、例へば普佛戰爭に於て佛國の支拂へる償金の如き、名義は如何様であつても、其眞意は佛國に過大の財政的負擔を課することによつて復讐戰を不可能ならしめんとするに在つたこと明かである。二は辨償的のもの、例へば戰費又は損害の全部或は一部を戰敗國が負擔するか又は雙方の戰費を比較して其差額を敗者が支拂ふか、最も寛大なる處置としては日露戰爭に於けるが如く雙方の捕虜收容費の差額を辨償する位のことにと止まつてしまふ、是は償金と云ふ名を附するとの出来ぬほどのものである。今度の戰爭の場合には恐らく懲罰的のものではなく辨償的のものであらう。極端な排獨的帝國主義者は此際獨逸に過大過重の償金を課して經濟的に破産せしめるか若くは少くとも半世紀や一世紀の間再び世界市場に競争者として立つ能はざる貧弱國の位置に陥らしめようと主張してゐるのも無理はないが併し無い袖は振られぬの道理で今度の戰爭に聯合諸國が支出したる戰費の全部を

一時に獨逸から徴收することは數字上不可能である、若し一時に徴收し得ぬとすれば年賦又は永久に利息の形式に於いて之を回收するの外はない。何れにしても現金殊に金貨金塊を以て之を支拂はしめることは不可能であるから大部分は自然通商貿易上漸次に之を回收するの外はあるまい、夫れにしては獨逸をして此際破産の域に陥らしめては償金又は損害の取りやうがなく恰も強慾の債權者が農家から苗代米までも取り上げてしまふと同様の愚を演ずることになる、同じ理由は獨逸から現金の代りに物資原料機械等を徴發せよといふ議論に對しても適用される、此等の生産材料を取り上げては産業機關が癱痺してしまふ。

そこで素人考への最も普通なるものは獨逸からの輸入品に重税を課して其海關税を以て償金に充ては如何と云ふに在るが是は經濟學の初歩を心得てゐる者から見れば明かな自殺的方法である、何故なれば間接税の原則として獨逸の產品に課された税金丈け購買者たる聯合國の人民が高い物を買つて損する譯になるからである。然らば獨逸に輸入する原料に對し重い輸出税を課しては如何と云ふ者もあるが、さうすれば獨逸の工業は高價な原料の故を以て夫れ丈け製産費が増し諸物價は之に準じて騰貴し輸出貿易は減退し其結果はつまり獨逸を世界

の通商貿易場から人爲的に排斥することとなつて折角の目的を達することが不可能になる。まして聯合國は如何に申合せて對獨輸出税を課しても中立國までも之に引入れる權利はないので廉價の原料がどしどし中立國から又は中立國を通じて獨逸に入り暫に獨逸を苦しめ得ないのみならず中立國をして對獨貿易を獨占せしめる結果となる。同じ抜け道は聯合國が獨逸商品に輸入税を課する場合にも存在する、獨逸製品が中立國の商人の手を経て輸入される場合には如何ともすることが出来ない。

一方又之と正反對の意見が素人の間に行はれてゐる、聯盟國が獨逸を強制して市價よりも廉い價格で其製品を輸出せしめ其差額丈けの輸入税を以て償金に充てれば所謂廉賣の危険はなく、聯合國民は何等の苦痛をも感ぜず、獨り獨逸國民丈け骨折損といふ懲罰を受けることになる、是は當然敗戰國民の義務であると云ふのである。然し之に對して第一に考ふべきことは聯合國が如何にして斯かる取引を強制することが出来るかといふ事である。獨逸の税關を監督して輸出税の形式で其差額を徴收することも出来ぬではなからうが、獨逸の製造家又は商人が輸出を肯ぜねば夫れ迄の事である、茲にも中立國をして獨り好利を博せしめるに過ぎ

ぬであらう。之を要するに如何なる税金の形式を以てしても償金取立ての目的を達するとの出来ぬとは明白である。一旦獨逸と通商貿易を行ふ以上は之を自然の經濟的原則に一任して人爲的に何等の拘束を加へぬとするより外はない、戦後の獨逸が勤勉努力の結果廉價の商品が海外に輸出する事が出来れば出来るほど之を購買する聯合國民は利する譯である、若し高價ならば買はぬ迄の事である、關稅戰は干戈の戰爭と等しく禁物である、ウエルソンが講和基礎條件十四箇條の中に極力之を警戒して居るのは當然であつて、保護政策に導くやうな平和條約は反古條約である、禍因を永久に貽すのみで國際聯盟の趣意とは正反對である。聯合國の政治家は斷じてかゝる愚を學ばぬであらう。

損害辨償は敗戦國民の義務

併し獨逸は何と云つても其國力の及ぶ限り其不法挑戰によつて聯合國に與へたる損害を辨償せぬ譯には行くまい、殊に白耳義、佛蘭西、塞耳維等に對して其義務がある。獨紙の傳へる所によればフォツシユ元帥は其所に於て獨逸は白佛兩國に對して二十三億磅他の聯合國に對

して十七億磅、合計四十億磅の損害を負擔する義務があると宣言したとある。又ロイド、ジョージ氏は選舉戰の演説に於て聯合國の要求し得る償金額は二百四十億磅に達するであらうと云つた。兩者の間に非常の相違はあるが一は實際の戰時損害を舉げ他は聯合國の戦費を舉げたのであらう。要するに戦費として凡ての交戰國の負擔せる額は約三百億磅と見れば大差なく、此三百億磅を世界の人口十六億四千七百萬に割當てれば、一人當り僅に十八磅餘にしかならないが、中立國及び未開國民を除いて實際此の戰爭に参加せる國民即ち中歐同盟國の一億五千萬聯合國の二億五千萬合計四億人に割當てれば一人前七十磅の負擔となり、之を獨逸、勃、土の四國民丈けに割當てれば一人前二百磅となる。二百磅は年五朱として一年十磅一日六片半の利息となる、而して一日六片半は獨逸人が食後の麥酒一杯の價に過ぎぬ。獨逸國民が戦敗に鑑みて大いに勤儉努力すること恰も普佛戰爭後の佛國民の如くすると假定すれば決して此負擔に堪へられぬ筈はない、彼等は十分に之を支拂ふの餘力があると或人は主張してゐる。

償金徵集方法

又モリス卿の如きは主として英國民の立場から立論して、戦ひを欲せざりし英國民が此戦争の結果、年々六億乃至七億磅の税金を負擔し行かねばならぬ理由は斷じてない。吾人は敵國民が之を辨濟し得る力を有するや否やを顧慮すべき義務がない、吾人は當然の權利として損害を付け出し、全世界の法廷をして其當否を判斷せしめ、一旦當然と認められたら聯合國は敵國をして之を支拂はしむる適當の方法を案出するまでの事である。此際何も敵國側に遠慮する必要はない、若し全部を支拂ひ得ねば支拂ひ得る程度まで之を強制するまでの事であると論じてゐる。

同時に英國商業會議所聯合會側の意見は極めて強硬である、同聯合會は來らんとする平和會議の決議として(第一)戦費全部(第二)公私財産の損害賠償(第三)個人的損失(兵士の年金をも含む)の賠償(第四)戦争の釀せる國家製産力の消耗率の回復(第五)敵國民の一切の負債賠償(第六)同上諸債務の利子仕拂を要求すべく首相宛に建議書を送つた。

前國會議員にして有力なる株式仲買人たるベツグ氏は倫敦商業會議所に於て「獨逸は幾何の償金を支拂ひ得るか」と題し注意すべき演説を試み此の際第一の急務は獨逸の國富、資源、國庫收入等を調査すべき國際調査委員會を組織するに在りと云ひ次で其調査の結果により獨逸の産業を癱痺せしめざる程度に於て償金債券を發行せしめねばならぬ、氏の精査によれば戦前に於ける獨逸の石炭、鐵、ポタツシユ産出額、輸入貿易額、鐵道運賃及び獨逸帝國聯邦の歳出入豫算等に基づけば獨逸は優に年々二億六千萬磅の償金を支拂ひ得る實力がある、此償金基金として聯合國は獨逸をして六十五億六千萬磅の償金債券を發行せしめねばならぬ、之れを以て不法掠奪財産の辨償、擊沈船舶の填補、徵發現金の返濟等に充てしめ、尙不足分は占領すべき獨逸植民地の値積り及び獨逸の海外放資(其額無慮十二億九千萬磅)の沒收等によつて填補すべきである、勿論以上の數字は到底十分に聯合國の戦費損害を償ふには足らぬが聯合國は獨逸の産業を滅ぼさぬ程度に於て大抵の處で勘忍してやるを却て得策とすると論じたのである。聽衆の會議所議員はベツク氏の主張は餘りに寛大なりと批評し中には戦後英國民の負擔せねばならぬ所得税は實に一磅に對する七志即ち三割五分に相當するであらう、其

内五志は之れを獨逸國民に負擔せしめ英國國民は残りの二志を支拂ふを以て當然とする、かくすれば獨逸國民の所得税は約六割に相當すべきも敗戰國の罰として是位の事は忍ばねばならぬ、つまり獨逸人は或期間寝る目も見ずに働いて利益は殆ど悉く償金の支拂に充てるの覺悟を持たねばならぬと主張した、又或人は自分の有する統計に徴すれば獨逸が年々五億磅の償金を支拂ひ得る力は十分あると斷言した。

終りにセドリツク。エルランド氏(米國の有名なる企業家)が米國及佛國政府に建議したる傾聴すべき償金取立案を紹介する。氏の案は下の三段に分れてゐる、(第一)獨逸の食料品分配法を國際委員の手に引受けて一切の仲買業を排除することにより其口錢、利益及び無用の運賃を節約し之を以て償金支拂に充てしむる事、此方法は米國石油王ロツクフェラー氏のアメリカン、オイル、トラストが多年採用して莫大の利益を收め得たる確實なる經驗に基づくものである。該オイル、トラストは石油供給の便法として到る處鐵道停車場に大タンクを設け其タンクより直接附近の顧客に賣却する方法を講じたのである、此方法を獨逸の食料供給に適用するには該國に於ける隨處の停車場を利用して食料供給の中心倉庫とし附近何哩かの住

民をして自ら來つて之を買入れしむるのである、斯して仲買人の利益を除くのみならず同種の食料を反對の方向に輸送したり逆送したりする無用の手數及び運賃を節約し得ること實に莫大なるものである。此の簡易分配法によつて産み出し得る利益は少くとも一箇年七億磅に達すべき見込が十分ある。(第二)エルランド氏は獨逸よりの凡ての輸出品に相當の税金を課すべきことを主張してゐる、勿論之に關しては前述の反對論があり必ずしも聯合國民の利益となる譯には行かぬが輸出税を課せられても尙海外に顧客を見出し得る程度まで獨逸國民が勤儉努力し得るものとすれば輸出税金は償金の一部として之を回收し得る譯になる。而して(第三)エルランド氏は其獨逸工業に關する智識から立論して獨逸のポタツシユ工業、エツセン鋼鐵工場及び大仕掛の電氣工業が是まで獲得してゐた莫大の利益の約七割五分を聯合國の手に收めるとによりポタツシユ工業のみで一億五千萬磅の償金を産み出し得ると論じてゐる。以上三種の徵集法を以てすれば一箇年優に十億乃至十二億磅の資金を得て之を聯合國への償金支拂に充てしめることが出来ること云ふ計算である。假に凡ての交戰國民の損害を五百億磅と見積り其うちから獨逸側自身の損害を控除して聯合國が當然請求し得る額は三百五十億乃

至四百億磅(フオッシユ將軍の言に比すれば約十倍)となる、一年十二億磅の償却が出来るとすれば獨逸の産業を毫も萎靡せしむることなくして三四十年間には綺麗に一切の義務を果すことが出来るであらう。但し是は現金又は物貨若くは植民地の値積り等を以て一時に償金一部の支拂をせぬ場合の事であるが、若し聯合國が是等の戦利品を積算して償金の一部とするに於ては、獨逸の債務は夫れ丈け減少し従つて十年乃至二十年間には敗戦の瘡痕より癒えることが出来るであらう。(一九一九、一、二二)

婦人問題

英國貴婦人の戦時事業

セントラル・ウオーク・ルームの戦時中の活動

井上侯爵夫人の紹介で英國貴婦人社會の戦時事業の一端を視察することが出来た。讀者の知る如く英國には平時から英國赤十字社と「オーダー・オブ・セント・ジョン」との二大機關があり、何れも大仕掛けの救護事業に従事してゐるが戦争になつてからは外にも澤山の病院や救護事業が開設され、英國上下の婦人達は競うて或は篤志看護婦となり、或は病院用品の製造に従事し、總じて男子に劣らぬ義勇奉公の精神を示しつゝ、あるのである。

中にも何々侯爵夫人とか何々伯爵令嬢とか云ふやうな肩書をもつてゐる此婦人達が平素の贅澤な生活や華美な社交を一切犠牲にして、此際一意専心に軍國の爲めに盡して居る有様は慥かに感歎に餘りある。私の第一に訪問したのはダルビー侯（前の募兵總監今の陸軍次官）の妹なるコスフォルト伯爵夫人が會長として働いてゐる赤十字社及び聖約翰救護班の給品本

部とも云ふべき「セントラル・ウオーク・ルーム」であつた。同伯爵夫人の案内で一々館内の模様を參觀したが澤山の部屋々に百人ばかりの老若各階級の貴婦人達が皆な白布の仕事を着けて一生懸命に裁縫仕事に従事してゐた。館内では一切各種の尊稱を略くになつてゐるので侯伯夫人でも單に貴婦人何々と呼んでゐる。此給品本部の仕事の時間は毎日（土日曜を除く）朝十時から午後一時までと午後二時から三時までで會員が其時間に一緒に集まつて各々受持の仕事をする。殆ど終日此處に居られては社交上の差支はありませぬかと尋ねたら、「當國では戦争中殆ど社交と云ふものはありません、つまり此處で一緒に仕事をするのが妾共の社交です」と答へてゐた。

私の訪問した週間の成績表によれば其一週間に七百七十個の製品を内地二百六十九個の病院に千五十四個の製品を戦地諸方面の野戦病院に發送した。海外に送つた分の内譯は佛國方面に六百六十一個モルタ島アレキサンドリヤ港ゼノア港など地中海方面に百九十六個、某病院船に百九十七個と云ふことになつてゐた。又其一週間に受領した衣服類の数は二萬七千五百二十一着で内外の病院に發送した数は二萬六千五百廿八着である。一梱の荷物の中には品に

依ては數百點の製品が這入るのだから一週間に出入する數量は夥しい多數に上るのである。

次に是等の有志貴婦人の熱心な働き振りに就いて少し紹介しよう。或一室に七十歳ばかりの老婦人がゐる。聞けば開戦後五人の子息と七人の甥を戦場に送り出して其うち既に八人まで戦死した。老婦人は遣る瀬なき悲歎に暮したが不圖思ひ直して一層のこと傷病兵の爲めに働いたら責めてもの懣めにもならうと云ふので、毎日朝から夕まで年若い婦人達の中に混つて斯うして仕事をして居るのだと聞いた。年若い貴婦人にも澤山喪服を着てゐるのを見受けたが察するところ何れ皆な同じ様な傷ましい經驗を持つてゐる人々だらうと思ふ。

某侯爵家令嬢が下女中

序でに此處で聞いた話で非常に感心したのは某侯爵家の令嬢たる二人の姉妹は聖トーマス病院の下女中として働いてゐるさうだ。それは貴婦人達の中には篤志看護婦や裁縫仕事や軍需工場の女工監督に従事してゐる人は澤山あつても、目下英國で最も手不足を告げてゐる下働きの女中を勤める者がないので、二令嬢は自ら進んで此のチャイ・ウーマンの最も賤しい仕

事を引受けてゐるのだとの事。英國の貴族社會は一番愛國心に富んでゐることは豫ねて承知してゐるが、夫れは獨り男子ばかりではなく女子も此際各自何か報國の事業に従事してゐるねば氣が濟まぬと云ふ有様に見受けられる。今度の戦争で多く貴族や富豪の子弟たる英國の若い士官の死傷率^{しやうりつ}が他の兵隊に比して非常に高いと云ふ事實は、一つは斯ういふ婦人達の後援の力に勵まされてゐる爲めでもあらうかと思はれる。

セント・ゼームス宮殿内の病院用品集散本部

私は井上侯爵夫人と共に今一つの貴婦人救護事業を訪問した。是れはセント・ゼームス宮殿内に在る同じ病院用品の集散本部で此處では別に製作には従事せぬが國內及び外國から寄附してくる無數の品物を分配整理して夫々發送する所である。此處に働いてゐる婦人は主にも宮中の女官達で會長には女王陛下が自身お成りになつて親しく世話をしてゐられる。宮殿内の幾つかの大きな廣間に下から上まで山のやうに積み重ねられてゐる各種の被服類は一々此處で分類されて諸方面の病院に供給されるのである。其數は既に三百萬點以上に達して

ゐると聞いた。

監督の一貴婦人は私を態々倉庫の一部に連れ行き東京の英國大使グリーン氏令嬢の盡力によつて日本から寄送して來た澤山の衣類と神戸の服部前知事夫人並びにライトフット夫人の手を経て寄送し來つたものとを私に示して「日本から着物が着きますと此處では大騒動ですそれは何時でも美事な着物が澤山集りますから誰れでも一番早く見たがるので丸で競争のやうに荷解を致します」と語つてゐた。日本の婦人方の手に成る是等の寄送品は傷病兵の身に着く前にセント・ジエームス宮殿内で先づ斯ういふ大歓迎を受けてゐるのである。同盟國の好誼はこんな所でも一層増進されつゝ、あるのを見て私は非常に喜ばしく感じた。

私は序なので宮殿内を一應拜觀させてもらつたが、あの莊麗無比な王冠の間や盛餐の間やヘンリー八世室や武器の間などは此際凡て荷物の置場か事務所として用ゐられ立派な敷物は捲き上げられ貴重な額面は取り外されて全く亂雜の状態になつてゐた。大理石の廊下で荷造夫が釘打をしてゐるやら金色燦爛たる階段で婦人達が箱詰めをしてゐるやら、まるで戦亂の一部を此處にも示して物凄い感じを與へてゐた。(一九一六、七、二二)

戦争と英國婦人

佛蘭西の婦人が開戦當時からどしどし男子の代りに新しい職業に就き、巴里市内の電車の手掌運轉手の如きは大抵婦人がやつてゐるとは夙に讀者の知られる所であらう。世界一の世話女房と云はれてゐる内氣な柔順な獨逸婦人も、近頃は各種の男子の職業に従事し、妙齡の良家の女子までが下水工事の爲に鋤鍬を執つて働いてゐるとは最近獨逸から歸つて來た人の直話である。何しろ舉國皆兵主義を文字通りに實行してゐる獨逸の事であるから此際男子の缺乏を告げてゐる程度は到底想像も及ばぬ所である。之に比較すれば英國の婦人はまだく暢氣な暇がある。眞白な夏衣を着てラケットを手にしてテニスコートに出懸ける妙齡の婦人や、派手な夜會服を着飾つて自動車を飛ばしてゐる貴婦人達を見る時は何處に戦争があるか分らぬ位であるが、併し英國婦人も國を思ふ衷情に至つては、決して他國の姉妹に劣つてゐ

る譯ではない。慈善救恤の事業にかけては恐らく英國婦人ほど熱心な者は他に比類がなからう。特志看護婦となつて戦場に立働いてゐる貴婦人達も何千人とあるのである。内地の救護事業は主として婦人の手によつて行はれてゐる。其れに近頃となつては段々男の手が足りなくなつて来たので、電車や鐵道の車掌切符掛は大抵女子になつて仕舞つた。一定の制服を着て活潑に立働いてゐるが乗客に對して丁寧なので中々氣受けがよいのである。ホテルや勸工場の見降器も多く婦人によつて取扱はれてゐる、中には客が多過ぎた爲にリフトの力が足りないで客のお世話になつたなどいふ奇談もある。是から追々婦人の職業の範圍が廣くなる一方であらう。軍需品製造の爲め婦人の職工は平時より何倍になつてゐるかも知れない。現に獨逸では武器製造に従事してゐる婦人の數は男子の六割を占めてゐるとの事である。英國でも近頃は「何故妾達にもつと仕事を與へないのですか」と云ふ聲が段々高く叫ばれて来た。是れは失業者の聲ではなくて良家の女子の叫びであるだけが一層頼母しい。一般に氣品を重んじ保守的氣分を尙んでゐる英國婦人の中から、世界の名物とも云ふべき例の戰國的參政權論者を出してゐる所を見れば、英國の女子魂にも中々悔りがたい或物が潜んでゐることは

明かである。政府の募兵廣告のうちで一番有效であつたのは女子の義勇心に訴へたのであつたと云ふのは恐らく事實であらう。今では英國の娘達は自分の情人を軍人になし得ぬ事を最大な不名譽と心得てゐるらしい。そこで戦時に於ける英國婦人の報國的任務は矢張り直接の仕事では無くして、寧ろ間接に男子を激勵して軍籍に就かしめる力に存すると云はねばならぬ。倫敦市内の要所々々に貼り出してある次の廣告文を読めば此の邊の消息が一番よく分かるであらう。

倫敦の若き婦人よ

御身の情人はカーキー服を着てゐますか？
若しまだ着てゐないなら着た方がよいと思ひませんか？
若しも彼が御身と御身の國の爲めに戦ふ事をせぬやうな男ならば御身の愛を受くるに足るの値打ある者と思ひますか？ 此際一人である女子を可哀相に思つてはなりません、多分彼女の情人は勇ましく軍人として彼女と彼女の國の爲めに戦つてゐるのでせう。

若しも御身の情人が王と國とに對する義務を忘るならば、やがては御身に對する義務を忘る時が来るであらう。

能く之を御考へなさい、そして早く彼を軍隊に加はらせなさい。(一九一五、七、五)

英國戦後の婦人問題

政治上より觀察せる婦人問題

英國戦後の婦人問題は之を政治上と經濟上の二方面から觀察するを便宜とする。勿論種々なる社會上の現象は此二方面に於ける變化の結果として起らねばならぬ。先づ政治上から見た婦人問題は如何なる成行になつてゐるか云ふに、開戦以來婦人參政權論者は所謂舉國一致の實を示す爲に戰爭中は全く此問題を中止する決議をなし、一時人心を寒からしめた例のバンカースト夫人等の戰闘的サツフラヂットも忽ち其矛を收めて熱烈なる愛國者と化して了つた。ハイド・パークやトラファルガー・スクエアに於ける彼等の野外演説は一變して募

兵運動の有力なる講壇と成つて了つた、彼等の主戰論は極めて猛烈なものであつて一面あらゆる獨逸種の人間を國外に放逐し、又は收監すべきことを主張し、開戦後間もなく起つた倫敦市内の排獨暴動の如きは彼等の教唆に因るとまで信ぜられた位である、同時に他の一方に於ては最も大膽な對外硬の外交政策を主張し、アスキス、グレー氏等の對外軟を攻撃すること最も激烈を極めた。昨冬バンカースト夫人が希臘問題に關して速にコンスタンチン王と外交を断ちヴェネゼロス氏の國民政府と正式の關係を結ぶべき事の決議を齎して國會議場に押懸け、外相サー・エドワード・グレーに會見を強請して門前拂ひを喰つたことは外電に據つて讀者は既に知れる所であらう。彼等の政府攻撃振は一種の特徴を發揮してゐた、夫は婦人の緻密なる觀察力に據るのであらうが、政府の對外軟の原因を當局者の閨門の關係に基くと見て、某々大官の夫人は獨逸種であるとか其姉妹は獨逸人に嫁してゐるとか云ふ如き内部の事情を摘發して、是等の當局を排斥するの必要を頻りに叫んだものである。併し政府攻撃許りが決して彼等の能ではなかつた、募兵運動や廢兵の救護運動に於ける彼等の功績は決して没すべきでない、彼等の戰闘的愛國的態度は慥に男子をして慚色あらしめたのである。然るに

茲に面白き一事は其後此サツフラヂット一派に内訌が起つてバンカースト夫人と其娘のバンカースト嬢とが全然反對の途を行くことになつたことである、夫人は飽迄主義を執りつつあるに拘らず、嬢は何時しか非戦主義に變じて盛に平和論を主張するに至つた。近頃嬢の催さんとする集會は秩序紊亂の廉を以て片端から差止められてゐる、併し此バンカースト嬢やスノーデン婦人等の率ゐる平和主義者の婦人團は其勢力中々に盛である、恐らく戦時に於ける平和運動の急先鋒を以て目すべきものであらう。

諸以上のバンカースト母子によつて代表されてゐる戰闘的婦人運動の二派の外にフォーセツト夫人やシドニー・ウエツプ夫人によつて代表されてゐる學者的穩健派の一派があつて、彼等は前者と全然獨立して開戦當時より今日に至る迄諄々として婦人參政權に關する社會學上並に經濟學上の所説を發表して已ぬのである。彼等は戰闘的サツフラヂットではなく、學理的サツフラヂットであるから、其穩健にして確的な所説には何人も耳を傾けざるを得ないのである、後日若し婦人の參政權が獲得せられるとすれば开は主として此穩健にして道理ある參政論者の貢獻に負ふ所ろが最も多大であらう。戰闘的參政論者は國民の惰眠を覺ます

の効力は有つても彼等を納得せしむるには餘りに過激に失してゐる。眠を覺ました國民は頓て正當なる論理に傾聴する時が來るであらう、而して其時期は慥に此戦争によつて到來しつゝある。戦時に於ける英國婦人の義勇奉公は或意味に於て慥に男子以上である、戦争の眞の苦痛は婦人によつて忍ばれつゝある。婦人の協力なしに此戦争の目的は斷じて達せらるべくもない、國民としての彼等の自覺は今や其絶頂に達しつゝある、單に男子をして内顧の憂ひなからしめると云ふ消極的勢力ばかりではなく、又救護慰安等の婦人特有の方面ばかりでなく、是まで男子に一任してあつた内外大小の國家の事務は片端より婦人によつて遂行せられつゝある、小は電車の運轉より大は軍器の製造まで、下は郵便脚夫より上は官衙の重要な位置まで今日婦人によつて占領されてをらぬ職業は殆どない位である。余は外務省や陸軍省に出入する度毎に最も異様に感ずる事は各事務室に只つた一人の男子の長官がゐるばかりで、他の數人もしくは十數人の官吏は悉く婦人であるを常とすることである。諸て斯くの如く婦人の職業が擴張されて其能力が認識された今日に於て、婦人は家庭の動物であるといふ古來の考へは到底成り立つべき謂れがない。婦人も亦家庭内に蟄居するを以

て満足すべき謂はれがない、責任の自覺はやがて権利の自覺である、婦人參政權の要求は今
日千萬言の演説文章以上に實際の事實に據つて其理由を説明しつゝある、戦後に於ける婦人
の參政權問題は今や原理に於ては既決の問題となつて了つた。極端なる頑固論者の外此點に
異議を挟むものは一人も無いであらう。先週結了した「英國議會内選舉法改正委員會」が、或
種の方法に於て婦人に參政權を與ふることを議決したのも當然の事である、但し如何なる方
法、如何なる程度まで之を與へるかは未決の問題として残つてゐるが、兎も角も該委員會（下
院議長を議長とする最も有力なる者）が婦人に參政權を與へるの必要を認めたる事は此際最も
注目すべき一事である。多分或程度の財産を有する婦人若くは國家的事業に従事してゐる成
年の婦人等に先づ男子同様の投票權を與へて漸次に之を擴張すると云ふ如き方針を執るので
はあるまいか。戦後に於ける英國選舉法の改正は何の途行はねばならぬ成行になつてゐる
が、其際果して何の程度まで婦人の參政權が設定されるかは最も刮目すべき重要問題であら
う。單に原理に於て賛成を表する位では到底戦後の婦人を満足せしめることは出来ない、今
度と云ふ今度こそ英國の婦人は必ず其宿望を達するであらう。唯其範圍と程度の問題のみが

今日に於て懸案となつてゐる、戦後の諸問題の解決中此婦人問題は政治上の一大中心問題と
なるに相違はない、フォーセット夫人の言を引いて云へば「戦争の産める結果の一は産業界
並に他の職業に於ける婦人の位置に革命を與へたる事」である、産業上の革命はやがて政治
上の革命である、政治上に於ける婦人の位置の向上は此戦争の産みつつある結果の最も重要
なる一つであらう。

經濟上より觀たる婦人問題

次に經濟上に於ける婦人問題は主として今日彼等の占めつゝある新なる職業を戦後に於て
再び男子に譲るであらうか何うかと云ふ問題である。最近軍需大臣アチソン氏の言明せる所
に據れば、今日軍事的業務に従事してゐる婦人の數は九十萬人の多きに達し、其内五十萬人
は軍器職工であると云ふ。開戦當時には唯の一人も無かつたものが今日約百萬の多きに達し
たとは如何に驚くべき事ではないか、別けても五十萬の軍器職工あるに至つては是こそ眞に
勞働界の一大革命である。比較的纖弱なる女子が如何にして砲彈の製造に斯くも多く従事し

得るかと思ふに、之は多少器械の調節を婦人向きに改良しさへすれば大抵の仕事は婦人で出来ると思ふ事である。近頃「ロイド・ジョージの軍器娘」といふ小冊子が出て頗る好評であるので、一讀して見たが如何にもよく軍器廠内部の實況が描き出されてゐる。之に據れば或る肝要なる仕事と荒仕事の外は大抵皆女工の手に據つて砲彈が製造されつゝある。給料は多少男工より安いのであるが夫でも一週間（六日間）朝業十五志、晝業十六志六片、夜業十九志六片が最低給料で、若し其外に割増仕事をすれば一週間一磅十九志の給料を得ること容易である。即ち女工一人の最低給料が一週間約七圓五十錢、最高給料が同じく十九圓五十錢、平均十三四圓である。此小冊子は昨年夏に書かれたのである、其後女工増給の問題が八釜しくなつて最低三十志即ち我十五圓を與へねばならぬと云ふ議論が盛になつた位で、政府も其後着々増給を實行してゐる筈であるから、今日に於ては女工の平均収入は優に一週二十圓以上に達してゐるだらうと察せられる。言ふまでもなく斯かる高給は戦前何處にもなかつた、戦争中でも他の普通の仕事に従事しては到底得られぬ額である。目下英國の家庭が女中の大拂底に殆ど困つてゐるのも無理はない。女中の給金は平均年に二百四十圓位であるから月給

にすれば廿圓一週間に五圓位のものである、軍器女工の四分の一にしか當らない。

諸斯くの如き仕事と報酬は戦時であればこそ得られるが一旦平和克復の後は如何に産業界の復活を豫想しても到底永く維持され得べき給料ではない、第一凡ての軍器廠は閉鎖されねばならぬ、第二何百萬の壯丁が除隊となつて歸つて来る。其際此五十萬の女工は何うするであらうか、残りの四十萬は軍器以外の仕事に従事してゐるからまだ多少勤續の見込があるにしても、差當り軍器職工の五十萬丈は自然解雇されねばならぬ、解雇された女工の多數は相當の貯金を懐にして喜んで家庭に歸るであらうか、中には一旦自分の働きを自覺した以上再び窯爐の前に蹲ることを肯ぜぬ者も多からう、彼等は自然他の工場に轉じて獨立の生活を営まうとするに違ひない、茲に男工との競争が始まるのである、如何にして此間の調和を計るべきか、戦後に於ける一大問題である、識者は夙に此問題を講究しつゝ、あるが大體に於て餘り心配するには及ばないと考へられてゐる、何故なれば婦人は何と云つても矢張り家庭本位の者であるから己むを得ざる必要に迫られる外は好んで外に出で、労働する者でない、平和克復後彼等の大多數は再び家庭の人となるであらう。只今日より豫期すべき一時は職業の轉

換が多少男女の職工間に行はれるであらうと云ふ事である、即ち仕事の性質上女工に適してゐながら是まで男工によつて占領されてゐた職業は戦時の經驗によつて一層多く女工によつて填充されるに至るであらう、夫だけ男子の位置は婦人によつて奪はれる姿になるが、其代り男子は新なる方面を開拓して相互に其能力を發揮することになるから、結局戦後の労働界は此職業の轉換によつて其能率を増加するの結果を生ずることになる。是は寧ろ喜ぶべき現象であるが只一時自覺せる婦人の競争によつて労働界に一種の混亂を來すべき形勢があることは争はれぬ事實である。若し最近労働大臣ホツヂ氏の豫言した通り戦後産業界に一大活況を呈する事が確實であるとすれば此婦人の競争問題の如きも左まで恐れるに足らない、是等は除隊兵士の就職問題と關聯して國家の職業周旋所の機關によつて適當に解決せらるべき性質のものである、夫にしても戦後の労働界に於ける婦人の位置が従前よりも遙に重きをなすに至る事だけは確實である。従つて夫が政治上の女權擴張に一大動機を與へる事も慥かである。之を要するに戦後の婦人問題は産業上に於ても政治上に於ても其位置の著しき向上を實現するに至ると云ふ事に歸着する、刮目すべき幾多の社會現象は之に伴つて起るであらう。

婦人の經濟的獨立は纏て結婚問題、人口問題、教育問題乃至宗教問題にまで多大の影響を及ぼすに相違ない、一面喜ぶべき現象を來すと同時に他面憂ふべき傾向も伴つて來る、是等の新現象に關しては後日筆を改めて報道することにする。(一九一七、一、二五)

銃殺されたる英國俠婦人

祖國の爲に従容死につけるカヴェル嬢

白耳義首府ブルツセル市に篤志看護婦學校を開いてゐた英國看護婦エヂス・カヴェル嬢は開戦後其家に數名の英佛白三國兵士を匿ひ、其國外逃亡を援助したる廉を以て獨逸官憲の爲に逮捕せられ、收監十週間の後軍法會議に附せられ、去十月十一日死刑の宣告を受けて翌未明銃殺の刑に處せられた。此事件が如何に英國の人心を激昂せしめ、獨逸の無慈悲に對する憤慨の念を増さしめたかは、日々の新聞に滿載されてゐる此の事件の記事によつて知ることが出来る。カヴェル嬢は立派に其犯罪を自白したので、罪跡分明獨逸軍法の明文上死刑に該

當することは當然であるが、其婦人たるの故と從來獨逸負傷兵の救護にも盡瘁したる故とを以て、白耳義駐割の米國公使及び西班牙公使等最後の瞬間まで有らゆる手段を盡して滅刑運動を試みたのであるが、遂に其効を奏せず、あたら一輪の名花は銃聲一發の下に朝の嵐と散つて仕舞つた。

英國外相サー・グレーが米國大使に送つた感謝狀の中に「此一事件は實に聯合諸國のみならず全世界の文明國民の間に名狀し難き戰慄と憤懣とを惹起せること疑ひを容れず」と云つてゐるのは、何人も同感であらう。更に廿三日のタイムスは其社説に於て滅刑の理由十分あることを論じ、獨逸の苛酷を責めたる後「彼等は夫の奈翁が曾てエンギーン侯を殺したる如くに、一英國看護婦を殺したり、而して此行爲により彼等が全世界の眼中に其不名譽の汚點を深くせること幾許なるか測り知るべからず、けに獨逸は英國の爲めに此上も無く利益ある行爲を成し遂げたりと謂ふべし」と結んでゐる。

愛國心のみでは十分でない

此勇俠なる英國婦人の死刑の前夜に最後の會見を許されたる英國從軍僧ガハン氏の手記せる所に據れば、彼女は驚くべき沈着と覺悟とを示し、先づ一身上の二三の事柄を遺言せる後神と永遠とを眼前に控ふる者の態度を以て種々なる嚴肅の物語をした、彼女は本國の友人等の彼女が祖國の爲に喜んで其一命を捧けたることを知り呉れんとを望む旨を語り、且曰く

『私は何の恐怖も何の戰慄も感じませぬ、私は屢人の死を見ましたので死と云ふものには不思議にも左程に恐ろしくもありません。私は最後の前に十週間の靜かな休息を與へられたことを神に感謝してゐます。生活は何時でも忙はしく色々困難な事だらけでした。夫で此休息の時間は私に取つて何よりも御恵でした、此處では誰も皆私に親切にして呉れました併し私は今此様に神と永遠との前に立つて只是丈の事を申します、夫は私が只愛國心だけでは十分でないと思ふとを悟つた事です。私は何人に對しても少しの憎しみも怨みも抱いてはならないと思ひます』云々

やがて最後の聖餐式を行つたが、彼女は心から福音の慰めの聖語を聽聞し『汝等我と俱に在るべし』と云ふ終りの聖語を繰返した時微かな聲で彼女も之に唱和した。式が濟んでから

時間の来るまで靜かに坐して色々の物語をした、それから彼女は親戚と友人への告別の傳言を托し、此際自分の靈魂の要求する所などを語り、神の恩寵の保證の聖語を唯基督信者のみ受け得る如く神妙に受け入れて全く安心の姿に見えた。

會見の時刻が濟んで訪問者が立ち上り『左様なら』を告げた時、彼女は微笑しつ、『復お會ひ申しませう』と言つた。末期の際には獨逸の從軍僧が終りまで附き添うて基督教の葬式を執行した、其語る所によれば『彼女は終りまで勇敢で且快活であつた、彼女は基督教の信條を告白し、而して自ら其國の爲に死するを喜ぶ旨を述べ終つて刑に就いた。彼女は女傑らしく死んだ』と。(一九一五、一〇、二三)

思想問題

戦亂中の英國思想界

英國の思想界は宗教家と教育家と操觚者によつて代表されて居る。言ひ換へれば教會の牧師と大學の教授と文學者によつて一國の思想界は指導されてゐる。戦亂の今日思想界の大勢を瞥見せんとすれば、矢張此の三方面を注意する必要がある。

物質文明の破産と教會の覺醒

先づ教會の方面を見れば、開戦の當時より英國の宗教家は異口同音に此戦争の正義の戦ひであり、文明及び人道の爲めの戦ひであることを高調して國家の政策を擁護するに全力を盡してゐた。基督教は平和を理想とする宗教であるが、如何なる價を拂つても平和を主張する宗教ではない、戦争よりも更に惡るいものが現はれて來た時は、之を征服するに暴力を以て

するは現代文明の程度に於て萬已むを得ざる手段である、否な之を爲すことが神の命である、之が爲めに戦ふのが基督教徒たる者の義務であると云ふ議論は謂はゞ宗教家になつて批准された英國國民の輿論であると云つてよからう。トルストイの絶對非戦論は常識を重んずる英國民には何程の勢力もない。平和論者も開戦の當初に於ては少しは活動したが、愈々開戦となつてからは全く沈黙を守つて只だ専ら戦後の平和運動を畫策しつゝあるやうである。併しながら戦争が段々進捗して慘害の度を強めてくるに従つて、心ある人士は追がに現代文明の矛盾を自覺するものが深くなつて來た。哲學宗教問題の大雜誌たる有名な「ヒツバート・ジョーナル」すら十月に戦争號を出したが、其論説の基調は戦争の辯護よりも現代文明の批判の方に傾いてゐた。今や物質的文明の破産を絶叫する聲が次第に高くなつて來た。如何に最眞目を以て見ても、所謂基督教國たる歐洲の文明國が古今未曾有の大殺戮を行ひつゝあり、而かも敵も味方も同じ神に勝利の祈禱を捧げつゝあると云ふ此事實は精神的文明の基本たる基督教の微力を自覺せしめずには居らぬのである。一面から云へば正義仁愛を教ふる基督教がなかつたならば、戦争は更に多く起り更に残忍を極めるであらうとも云へよう。併し

二千年間歐洲の人心を教化して來た基督教が未だに世界の平和を維持することが出來ず、其交戦の範圍を局限することも出來ず、愈々世界の大亂となつては茫然袖手傍觀するより外はないと云ふ今日の有様を見ては、誰しも宗教其物の勢力の未だ如何に微弱なるかに想到せざるを得ぬのである。英國の宗教世界は今やそろ／＼自覺し初めて來た。敵國の不義を罵り其宗教家を責めるよりも先づ自らの怠慢と罪過に對して神の前に懺悔の祈禱をせねばならぬと云ふことを悟つて來た。斯くて英國の宗教界は開戦前よりは慥かに覺醒の兆を示して居る。教勢は明かに振興しかけてをる。多數の男子の應募出征に拘らず教會の出席者は著しく増加して居る。宗教の大復興を起さねばならぬと云ふ熱心が非常の勢ひで燃え上がつて居る。殊に東洋其他の非基督教國に對する傳道事業を阻害せぬ爲めには戦後に於ける歐洲基督教の振起復興が何よりの急務であると云ふ考へは一般宗教家の念頭を支配しつゝある。

「孔子教と其復興」と「靈魂不滅論」

次に學者の方面を見れば開戦前には各大學の教授が連署して非戦論を發表し政府の反省を

促がしたこともあるが、今では心機一轉却つて各自専門の知識上より此戦争の正義を主張しつゝあると同時に、現代文明の根本的批評は多く是等の大學の教授によつて發表されてをる。オックスフォード、ケンブリッジの大學生は出征の爲め平常の半分に減じた今日に於ても大學の講義は依然として繼續されてをる。戦争に毫も關係なき問題の講演會は倫敦市内に於ても殆んど毎週催されてをる。其中の二三を舉ぐれば、ケンブリッジ大學のジャイルス教授は「孔子教と其復興」と題する八回のヒツバート講演を試みて相當の聽講者を得てをる。パルミンガム大學の總長サー、オリバー、ロツヂ博士は倫敦に於て「靈魂不滅論」を講じ其多年の研究に基いて最も大膽明確に死後の生存を立證したが、忽ち科學界に一種の物議を醸し「タイムス」紙上は一時之で賑はつた。

バーナード・シヨウの「所得不平均」論

尙此際英國思想界の餘裕を證明すべきは社會主義者たる文豪バーナード・シヨウがキングスウエーホールで毎週一回「所得の不平均」を主題とする經濟問題の六回講演を試みたが、追

がの文豪丈あつて、毎會二千の聽衆を吸引したことである。余も一回聽講したが虎視眈々たる白頭翁の例の罵詈雑言、諧謔百出の怪辯は誰も彼も只だ酔はされてしまつた。講演が終ると質問自由と云ふので色々な質問が起る、余の行つた時は質問者の三人まで皆な婦人であつたのは一の奇觀であつた。お負けに其日の司會者はスザン・ローレンス嬢と云ふ倫敦區會議員であつたが、其開會の辭は中々振つてゐた。此際大英國の政府の有らゆる施設よりも一個のミスター、シヨウの此の講演の方が國民の經濟狀態に至大の關係がある、其證據には現に今夕の盛會を見給へと云つた時は大喝采であつた。シヨウは何と云つても當代の一人豪である。バーナード・シヨウ以外の文豪がまだ講演に立つた事を聞かないが、戦争に全く關係ない著述や講演が次第に人氣を得つ、ある兆候は『タイムズ』が例の一週間の『文學附録』を復活して新著の批評紹介を始めたことでも分る。固より戦争文學の發行は實に雨後の筍の如く停車場又は街頭の書肆の店先は殆ど之を以て埋もれてゐるが、一般思想界の問題に縁が遠いから茲には紹介する必要もない。

次に今一つ書かねばならぬ事がある。獨逸の軍國主義の攻撃に附帶して、其根本思想はニ

イチエの自我擴張主義の哲學に胚胎すると云ふ見地から、英國の思想界は今やニイチエ哲學の攻撃非難を以て鳴り互つて居る。ニイチエの非基督教的思想が近年英國青年の思想を攪亂して居つた事は明かであつたが、今こそ復讐の仕時と云はんばかりに宗教家も學者も協力して一生懸命に其誤謬を指摘し今回の戦争の張本人は恰かもニイチエであるかの如く攻撃的となつて居るとは中々面白い現象である。戦争の御蔭で俄かに蘇生した半狂哲人は地下に莞爾たらざるを得ないであらう。(一九一四、一二、二)

戦時に於ける英國人心の變化

開戦以來英國民は一般に精神的になり宗教的覺醒を示してゐることは争はれぬ事實であるが、之と同時に國家的觀念が非常に勃興した。去る二月廿六日倫敦大學でオックスフォードのジャツクス教授が「戦時に於ける人心の變化」と題する有力な講演をしたが能く這般の消

息を傳へてゐる。

所謂帝國の戦争、帝國のための戦争

教授は先づ今日ほど人心の一致して同じ問題を眞面目に考へつゝ、ある時代は英國古今の歴史に未曾有であると斷言し、進んで戦争は英國國民の國家に對する從來の觀念を二變したことを高調した。英國國民は今まで餘りに個人的であつた。國家を自己の利益と幸福の爲めに利用するとばかり考へてゐた。正直のところ英國人は餘りに安逸に耽り利己主義に陥つてゐた。自分が愉快に暮せさへすれば夫れでよいと思つてゐた。國家も亦た恰かも子に甘い母親の如く唯々として人民の願使に甘んじてゐた。然るに此戦争により國家の安危が氣遣はれるやうになるや否や兩者の關係は一變した。今まで個人の幸福の機關とのみ思はれてゐた國家は忽ち絶對的命令者の地位に立つた。彼女は嚴然として「國民よ今度は自分の番であるぞ、今までは何でも汝等の命に黙從してゐたが今度は反對に汝等に絶對服從を要求する、財産も出せ、生命も出せ、凡ての幸福を我が爲に犠牲にせよ」と命令した。而して全國民は一言の不平も

なく其命に服從した。今日英國國民の現はしてゐる義勇奉公の精神は從來の對國家的態度の一變を示し得て餘りある。

愛國心の勃興に伴うて、英國國民は大英帝國の凡ての領土を尊重するやうになつて來た。元來英國は知らず識らずの間に何時のまにか世界の最大帝國となつて仕舞つたので、帝國的自覺が極めて薄弱であつた。然るに今度の戦争はリンコルンの句調を借りて言へば、實に「帝國の戦争、帝國によれる戦争、帝國の爲の戦争」である。今後帝國の使命及び責任に對する國民の自覺は一大進歩を來すであらう。

世界人類の人道主義

英國國民は一面國家的觀念が強くなると同時に他面現代文明の真相を深く考へるやうになつて來た。實に今回ほど大仕懸けなる人類野蠻性の展覽會は未だ曾て無かつた。二十世紀の文明は悉く其假面を脱ぎ棄て、血に渴く赤い齒牙を暴露した。人類の狂態を眼前に見せつけられた吾人は初めて愕然として、抑も文明とは何ぞや、其の原動力は何ぞや、と云ふ大疑問に

逢着した。戦亂の悲惨を試験するにつけ世界平和の維持策に就いて、最も痛切に考へずには居られなくなつた。戦争の眞因を根本的に研究するやうになつた。美はしい理想の追求ではない、最も切實なる眼前の問題である。

一見すれば今度の戦亂は獨逸の軍國主義と英國の商賣主義との衝突の結果であると考へられるが、少しく思慮ある人士は此解釋に満足するとは出来ない。商賣主義のみで世界の平和が維持されると思ふのは大きな間違である。戦争は却つて富國と富國との間に起る者である。現に今度の戦争も獨逸の軍國主義の背後に潜んでゐる商賣主義と英國の商賣主義との衝突ではないか。單なる商賣主義は國民をして利己的個人主義に陥らしめ國家的觀念の缺乏を來し國民性の墮落を來らしめる。戦亂の種子は茲に胚胎してゐる。商賣主義を以て軍國主義を打破しきへすれば夫れで世界の平和を維持することが出来ると思ふほど大なる謬見はない。世界將來の文明の眞動力は侵略的軍國主義でもなく利己的商賣主義でもなく夫れ以上の新しい力でなければならぬ。此力は即ち覺醒せる世界人類の人道主義に外ならぬ。從來文明の缺陷を悟り新しき基礎の上に世界の文明を改造するの覺悟と努力とを要する。言ひ換へれ

ば全世界の國民が自己の謬想と罪惡とを悔い改めて眞に自己の靈魂を發見するにあらざれば世界の平和は決して維持される見込がない。文明の改造は固より至難の業であるが、今回の空前の大戦亂が全世界の人民に與へつゝある教訓は此大理想の實現に對して意外の效力を有するであらう。一國民丈けの受ける教訓は夫れ程の力もなからうが全世界の國民が同時に同一の教訓を受ける時は案外偉大なる効果を奏せずには居るまい。軍國主義と商賣主義とを超越せる人道主義の勝利は今後の世界文明を一變せすば已まぬであらう。(一九一五、三、一)

興味ある敵愾心問題

「憎惡の歌」

獨逸人の英國人を憎むことは殆ど言語同斷で、例の「憎惡の歌」の作者は獨帝から勳章を賜はり、此歌は何百萬枚となく印刷されて廣く國內に配布され、小學校の兒童は國歌同様に之れを練習してゐる位である。獨逸人の敵愾心は英國人の骨を噛み血を啜らねば已まないと

云ふ勢ひである。之に對して英國側では最初の間こそ極めて沈着の態度を保つてゐたが、近頃では獨逸側の態度が餘りに暴慢無禮に流れて來た爲め、何時のまにか獨逸人を憎むの念が強くなつて來て、今では普通の愛國心の發露を以て説明することの出來ない随分極端な言行が目に着くやうになつて來た。そこで心ある人々は之を見て餘りに大人氣なき事に思ひ竊に心配してゐる者も多いのであるが、此種の意見を最も露骨に大膽に發表したのはイートン學校の校長リツテルトン博士其人であつた。博士は三月下旬倫敦ウエスミンスター・セント・マーガレット教會に於て『愛敵』と題する一場の説教を試み其中に斯う云ふ意味の事を云つた。元來我英國が此戰爭に加入したのはアスキス首相の言明した通り國際間の憎惡猜疑を一掃して列國相互の理解親善を來らせる爲めに獨逸の侵略的野心を打破するの目的を以て起つたものである。然るに獨逸人が英國人を憎むによつて我も負けずに彼を憎み返すに於ては謂ゆる暴を以て暴に報ゆるのであつて斯くては獨逸國民六千萬人の胸裡に人爲的に植ゑ附けられた憎惡の念を何時までも緩和する事が出來ないのみならず、却つて益々之を助長するに過ぎないのである。獨逸が英國を憎み嫌ふのには矢張り相當の理由はある、例へば英國が今日の大

を致した所以は決して正義人道に叶つた譯ではない。獨逸が今日世界的大勢力にならうとしてゐるに對しても相當の雅量を抱かねばならぬ。只だ獨逸の遣り方の餘りに傍若無人なるに對しては飽まで膺懲の目的を達せねばならぬ。講和の條件についても餘りに獨逸を叩き潰す方針を取つては、恐らく愈々獨逸をして英國を憎むの念を増さしめ復讐的敵愾心を燃えしめるであらう。出來る丈け公平で無理のない所で和睦せねばならぬ。若しも或人々の主張する如くキールの軍港を國際港にせしめようとするならば我英國もデブラルターを開放せねばならぬではあるまいか。獨逸をして全く立場を失はしめるやうな考へを以て此戰爭を繼續することは當初の大目的を忘れたものと云はねばならぬ。今や英國國民は敵國の敵愾心に釣ひ込まれて自然に無用の敵愾心を抱くやうになりつゝある。汝の敵を愛せよと云ふ教主の精神は餘りに閑却せられつゝある。我等は我國家の存在の爲めに戦ふと同時に敵國六千萬の人民の精神をも其危機より救うてやらねばならぬ。是れが基督教國民の當然取るべき態度である。然らざれば英國國民は永く偽善者の汚名を免かれ得ぬであらう。

此説教が一度び公けにせられるや否や攻撃の矢は忽ち博士の一身に蝟集した。全國の新聞紙に現はれた多數の寄書家は博士を以てプロジヤマンと云ひ非愛國者と云ひ賣國奴と云はぬばかりに攻撃した。博士は二度ばかり辨明の寄書を試みたが激昂せる輿論は益々反抗の度を高めて一時は博士をして名譽ある位置を去らしめねば已まぬ程の勢ひを呈した。併し追がに言論の自由を重んずる英國の事として人身攻撃も極端までは行かずに済んだのであるが、一般の輿論は兎に角博士の言論の機宜を失つたものであつて此際發すべき言ではない、つまり不謹慎の譏りは到底免かれまいと云ふに歸した。イートン校長の説教問題は三月の末から四月の初にかけての全國新聞の紙面を埋めた問題であつて、英國人心の趨向を知るには屈強の材料であるから取り敢へず通信を試みた次第である。

但しリツテルトン博士は最近の日曜日に又も某地で説教して「敵を愛せよとは父母妻子を愛せよと云ふと同じ意味の愛を敵に與へよと云ふのではない。愛敵の精神とは敵をして神に

近づかしめんと欲する熱情、即ち敵をも救はんと欲する不斷の渴望に外ならぬ」と云つた。是れは苟くも基督の信者たるもの、一様に是認する所であらう。若し博士が最初より此の抽象的理想の領分を越えずに、具體的時事問題に立ち入らなかつたならばあれほどの攻撃は受けなかつたであらう。心ある英國人は博士の大趣意に對して寧ろ同情を抱いて居ることは看過しがたい事實である。今や英國國民は其愛國心の發揮につれて極端なる敵愾心を焚き付けられつゝある。敵愾心と愛國心とは飽まで相伴はねばならぬものであらうか。英國國民は最初からさう信じなかつたやうであるが、事實は段々其のやうに傾きつゝある如く思はれる。此先きの成行は果して如何。(一九一五、四、五)

壯烈なる英國の二大學府

戦時の英國學府は何んな景況かと思つて、僕は過ぐる二週間にオックスフォードとケンブリ

リツヂに遊びに行つた。牛津は倫敦の西方劍橋は北方何れも一時間半程の汽車里程で丁度倫敦と三角形を描いて居る、一通りの見物丈けならば樂に日歸りも出来るが、會ひたい校長や教授もあり、些と調べたい事もあつたので、僕は一夜泊りでゆつくり遊んで来た。

學生の三分の二は義勇兵

一概に牛津、劍橋大學と云へば英國の二大々學のやうに思ふ人もあらうが、夫は大きな間違ひで兩地には何れも二十餘個の所謂カレッジ(學院)なるものがあり、其多くのカレッジを總稱して一は牛津大學、他は劍橋大學と云ふのである。勿論各學院は一つの統一機關の下に總括され、相互の間に密接なる聯絡もあり、共通の設備も出來てゐるのであるが、各學院は或意味に於て立派な獨立團體で、各其歴史を重んじ其特長を發揮してゐる點は、個性の尊重を主義として居る英國の學風に相應しき制度である。

煤煙に燻ばれる倫敦を去つて、綠林牧野に取圍まれた幽邃閑雅の大學市に行つて見れば、命も延びるやうな氣持がする。之に中世紀其儘の古色蒼然たる諸學院の大建築、其建物の中

心となつてゐる教會堂の空に聳ゆる尖塔、學生本位の質素な商店の屋竝、何れも心地よい感覺を與へて、學問をするには如何にも適當な場所だと思はしめる。

兩大學共平時は何れも三四千人の學生を有し、街頭に出會ふほどの者は悉く書物を小脇にはさんだ學生か、角帽寬衣の教授連であるに、戦時の今日は光景全く一變して學生の三分の二は義勇兵となつて出征して仕舞ひ、残る三分の一中にも地方軍に投じ、軍服のまゝ、教場に出席して居る者も澤山ある。壯年教授の中にも軍服姿で教壇に立つて居る人が中々あるのみならず、學院の校舎は大抵軍隊の宿舎に充てられてゐるので、大學市は今や一變して大きな軍營地と成り了つた觀がある。牛津は夫程でもないが、劍橋の如きは全市軍人を以て埋もれて、學生は殆ど姿を認め得ぬ程である。聞くが如くんば大學では少しも義勇兵應募の獎勵をした事はなく、全く個人の自由に一任したのであるが、學生は争うて自ら國難に赴いたのである。學生として此大戦争に参加しないのは一種の耻辱の如く考へて、事情の許す限り義勇奉公の一途を選んだものらしい。現に醫科大學の學生の如きは寧ろ大學に在りて將來の爲に素養を積んで貰ひ度いと云ふキツチナー元帥の内諭があつたにも拘らず、どしどし

學業を擲つて出征軍に投じた。是は一面已むに已まれぬ愛國の至情に驅られて起つたものとして大に感すべき點もあるが、又一面より見れば學生の身として少しく其本分を誤つた嫌ひがないでもない。如何に國家の大事とは云へ英國國民としては些と慌て過ぎた感があるやうであるが、併し實は茲が英國學生氣質の最も面白い一面である。

大學生活は最も光榮ある愉快なる一時代

元來英國の大學生は大學生活を以て只一生懸命に勉強して學校を卒業しさえすれば夫で可いと考へる者ではない、彼等は學生時代を單に一生の準備時代とは心得て居ない、寧ろ一生の最も光榮ある愉快なる一時代人生の最も意義ある一部と心得て居るのである。日本の學生は卒業が目的であるが、英國の學生に取つては如何に學生時代を樂むべきか問題である。つまり學生時代に既に一個の紳士として生活して居るのである、乃で場合によつて一年や二年卒業の時期が後れる位の事は一向何とも思つて居ない。寧ろ自分の最も會心とする意義ある生活を學生として送ることが、彼等に取つて一番大切な事になつてゐる。大學を卒業して

一定の學位を取る學生の割合に少數であるのは之が爲めである。

とは云へ彼等は決して學業を忽にする譯ではない、随分根氣よく勉強もする、併し彼等は愉快に勉強する、餘り無理はしない、只一定の課程を馬車馬のやうに一目散に駆け通せば夫でよいとは思つて居ない。今回の如き世界の大亂に際し國家の大事に臨んで、國民としての第一の義務を果す事は、學生として最も相應しき事であると考へて居る、仍で彼等は一個の市民として争うて義勇兵の募集に應じた。勿論戰場で死ぬかも知れぬ、夫も義務の爲には毫も躊躇する所ではない、幸に無事に凱旋するを得るならば再び學生となつて勉強をする。つまり一二年の歲月と義務の履行と孰れが重いかと云ふ問題に過ぎない。

牛津も劍橋も其宏壯な大學の建物は大抵空屋の如く森閑として居た。テニス・コートやクリケット・グラウンドも草生ひ茂つて、運動家の姿は稀であつた。學生のカフェーはカーキー服で賑つて居た、併し日々の學課は規則正しく續けられてゐる、僕の訪問した七十餘歳の老教授は近頃助教が出征したので、老人は却つて忙しいと語つて居た。牛津近郊の農家には負傷兵が澤山收容されて、赤十字旗が到る處に翻つて居た、劍橋には廣大な臨

時病院が建て列なつて、多くの傷病兵が芝草の上に横たはつて居た。僕が一學院長を訪うて「英國は最後の勝利を得るまでは姑息の平和を結びますまいね」と念を押して見た時、白髪の老翁の眼は異様に閃いて「御安心なさい、大英國は伊達で戦争はして居りません」と答へた。此老教授は最近其一子を戦場で喪つたのである。(一九一五、五、一一)

戦後の宗教問題

國民的悔改と希望運動

近頃倫敦市中の辻々に黒帽詰襟の宗教家が群集の中に立つて祈禱讚美を捧げ簡單な説教を試みてゐるのを多く見受ける、之は今月から英國全體に亘つて大仕懸けに開始された「國民的悔改並に希望運動」と稱する宗教事業の一端を示すもので此運動の序幕としてカンタベリーの大僧正は去る一日にウエストミンスター、アッペーに於て稀有の大説教を試み盛に國民的宗教的覺醒を促した。爾來全國の各教區に亘つて多數の所謂使僧なるものを派遣し、此

運動の趣旨の貫徹を圖つてゐる。言ふ迄もなく其趣旨とする所は「今回の戦争は他に多くの原因があるとしても精神的には國民が基督教の根本教理に背き人類同胞の大義を忘れ私心私慾に驅られて有形上の快樂にのみ耽つてゐた神と人とに對する罪惡の結果に外ならぬのであるから、此際全國國民が心の底から自己の罪過を悔い改めて心靈的に一大覺醒を行はねばならぬ。若し此覺醒が行はれるとすれば精神界は爲めに一新して大にしては全世界の人類小にしては英國國民各自の眞の幸福を齎らすべき希望が洋々として前途に横はつてゐる。戦争に勝つても依然として罪惡の奴隷となつてゐるは數百萬の鮮血を流した甲斐は毫もない、先づ國民的に悔改せよ然る後に希望の光明に接することが出来る」と云ふに在るのである。そこで「悔改」と「希望」との二つを標語として今後數ヶ月に亘り到る處の會堂並に戶外に於て盛んに此趣旨を宣傳し無宗教家若くは宗教に冷淡なる者は申すに及ばず籍を教會に置きながら有名無實の信者たるに過ぎない多くの國民をして心靈的覺醒を行はしめ様と一生懸命に努めつ、あるのである。但し此運動は其名を國民的悔改希望と稱するとは云へ實は國立教會たるチャーチ、オヴ、イングランド丈の運動であつて國民の過半数を占めてゐる非國立教會(自由教會

諸派) 竝に天主教會を除外してゐるのであるから嚴格の意味に於ては國民的宗教運動と認めるとは出来ぬ。當初自由教會側には同じく此運動に加はつて一齊に國民的覺醒を喚起しようと思ふ希望があつたのであるがハイ、チャーチと稱する國立教會内の儀式派が反對した爲に大聯合の相談は纏らず結局國立教會のみの計畫となつて了つた。此點は如何にも惜しい事であつて國立教會内に於ても寛容なる思想信仰を抱いてゐる宗教家は任意に其地方の自由諸派と協同して此運動を一層手廣く行ひつゝある向もあるのである。一方自由教會の方に於ては形式的には此運動に加入しては居らぬが其趣旨に對して何等反對すべき理由もないのであるから精神的には互に相呼應して國民的覺醒を促しつゝある有様である。

出征兵士の宗教的覺醒

従つて開戦以來英國の宗教界は、目下最も活氣を帯び其信仰的氣分が最も緊張の度を示してゐると謂つてもよからう。實際戦争が段々長引くに伴つて國民の宗教心は間接直接に其深刻なる經驗の刺戟を受けて益々緊張せざるを得ぬのである。今では子弟ある家族にして戦線

若くは他の兵役に之を送出し居らぬ者は無い位である。何十萬の家族は既に其の最愛の者を喪つた、此先き失ふ者が何れ程多いかも知れぬ。死生の大問題に觸れて心靈的慰安を求めつつあるのは獨り戰場に立ちて自ら死生の巷に出入して居る何百萬の兵士のみではない。由來人間の宗教心は平素事無き場合には沈靜し易く一朝大事に臨んで覺醒し來る傾向を有してゐる。斯かる覺醒は戰場に於ける何百萬の兵士の大多數に起りつゝある事明白である。此點に就いて種々感涙を催させるやうな實話を耳にするが、今之を記述する餘白はない。思ふに英國國民は其家庭に於ける宗教的氣分が濃厚であるだけ、平素子弟の心裡に潜んでゐる信仰心が此際覺醒し來ること多いのであらう。

倅斯く宗教的に覺醒した兵士が一朝平和になつて凱旋し來る場合に於て若しも内地の宗教界に之を迎へる準備が無いとしたならば夫れこそ此上もなき不幸である。茲に今後の宗教界の大問題が潜んでゐる。覺醒して眞面目になつた青年子弟の心靈的要求を満足させるだけの準備が内地の宗教界に無いならば折角血を以て購つた貴い精神的獲物を空くするばかりではなく、却つて反對に最も悲むべき反動を來らせて青年國民の道德的墮落を促すやうにならぬ

とも限らない。否此危険は今日に於ても既に現れつゝある。戦争は一面人を眞面目にすると同時に多面幾多の不徳を奨励するものである。初めて死生の巻に立つた瞬間には心靈的に覺醒しても其度が重なるに連れて次第に慣れつこになり遂には却て自暴自棄に流れて了ふ恐れがある。割合に軍規の嚴肅を以て誇りとする英軍に於ても此危険は決して少くない。そこで平和後眞面目になつて歸つて来る兵士と墮落して歸つて来る兵士と孰れが果して多いであらうかは姑く別問題として孰れの場合に於ても之に對する宗教家の責任は多大であると謂はねばならぬ。余は過日或有名な宗教家に向つて『今後最も大切な宗教界の事業はクリスチャン、ソルチャース、リーグ(基督者兵士同盟)とも稱すべき覺醒軍人の精神的團體を組織する事であらう』と語つたが彼は『現に其様な性質の團體が諸處に起りつゝある、總ては國民的大團體が起るであらう、否必ず起さねばならぬ』と答へてゐた。

要するに兵士が凱旋して來た時分に何うするかと云ふ問題は社會問題、勞働問題、經濟問題其他各種の方面に亘つて大問題であるが別けても宗教問題として今より最も研究を要し準備を要する一大事である。今回の國民的覺醒希望運動の如きは單に其一端緒たるに過ぎない、

將來の英國宗教界は戦時と云ひ戦後と云ひ益々多事であらうかと豫期される。

諸宗派の合同の機運

終りに一言すべきは今後英國の宗教界に於て宗派合同の機運が大に促進されるだらうと云ふ一事である。今や戦争は有らゆる階級を打破しつゝ、あると同時に別けて宗派の區別を除去しつゝ、あることは顯著なる事實である。國立教會も自由教會も天主教會も將又猶太教も共に全力を擧げて國難に赴きつゝある。最近天主教徒が倫敦市長になり猶太教徒が陸軍將官になつたことの如きは單に其一例に過ぎぬ。宗派的寛容の氣分は戦争の御蔭で著しく發達した事例が外にも澤山ある。戦争は萬事破壊者であると同時に又萬事の調和者である。國立教會と自由教會との反目軋轢の如きは必ず戦後に於て其大部分が除去されるであらうと思はれる。就中自由教會其者の中に於る諸派の合同聯合の機運は戦後必ず長大足の進歩を來すであらう。現に過日オックスフォードに於て催された自由教派聯合會議に於ては是まで英國の宗教界に前例なき程の決議が行はれた。從來とても自由派聯合大會なるものが年に一度は開か

れてゐたが各派の組織制度等には全然立入らず單に外部に對する共通の問題を討論協議する位のものに過ぎなかつた。然るに今回の聯合會に於ては更に其歩を進めて各派の憲法の許す範圍に於て共同の事業を經營し會員の轉籍出入を自由にし共通の信仰箇條を制定し常設の中央本部を設けると云ふ處まで行つたのである。日本の新教諸派の間には教會同盟と稱して既に斯かる組織は出來てゐるが英國には是迄まださういふ者が無かつたのである。然るに今回單に戰爭のお蔭ばかりではないが併し夫れが大なる動機となつて斯かる大接近が宗派間に行はるゝに至つたことは大に注意すべき現象である。此機運が果して何處まで發展するかはまだ容易に斷言は出來ぬが既に自由教會の間に此事が行はれるとすれば夫れが更に一步を進めて今度は國立教會と自由教會との間に何等かの聯合運動が行はれるに至るは豫想するに難くはない。諸宗派の統一の合同と云ふことは到底近き將來に於ては望まれぬことではあるが併し聯合的統一といふことは決して至難の業ではない。各派其獨立を維持しつゝ、而も或種の組織の下に共同一致の實を擧げることは教會其の者の使命を果し宗教の權威を重からしめる上に於て多大の貢獻となるであらう。(一九一六、七、一二)

英國戰後の教育問題

英國の教育對宗教の問題

戰爭の副産物として教育問題の再燃を見るに至つた事は注意すべき現象である。由來英國に於ける教育問題と云へば例の教育對宗教——學校對教會——の關係問題であつた。即ち國民全體の租税によつて設立されてゐる公立學校に於て國立教會の信仰箇條を生徒に教ふることは非國立教會即ち自由基督教諸教派の極力反對する所であつて爲に彼の受働的反抗運動と稱して絶対に教育費の租税を支拂はぬと云ふ團體までも起り自由主義の闘將たる例のクリツフオド博士の如きは其ため幾十回の財産差押へを受けたが斷じて斯かる不公平なる租税を納めぬと云ふ決心を示してゐる位である。つまり英國の國立教會たるチャーチ、オヴ、イングラントは其名こそ國教會であるが實際は國民の半數にも充たぬ信徒を有するのみで國民の過半は自由教會諸派又は天主教會等に屬するものであるから官公立學校に於て一定の宗教教育を施

すと云ふ事はどの途不公平たるを免れぬ。そこで此難問題を解決する一方法として全然宗教教育を除去して純粹なる智的教育のみを施すべし、と主張する所謂セキユラー、エヂュケーション、アソシエーションなる有力なる團體も起り同時に彼の佛國及び米國に於けるが如く教育上に於ける政教の分離を實行しようとする運動も起つたのであるが、何分にも宗教の權威が隠れたる大勢力となつてゐる英國の事であるから教育と宗教とを全然分離するとは到底言ふべくして行ふべからざる所である。そこで先年バルフォア氏の教育法案なるものが一種の妥協案として採用せられ今日の處では原則として國立教會の信仰箇條に基ける一般の宗教々育を諸學校に於て行ふと同時に、他宗派に屬する子弟の爲めには別に其宗派の牧師又は僧侶によれる特別の宗教々育を施し得る規定を設けて、辛くも一時の小康を得つ、ある有様である。併し斯かる姑息案は一方自由諸教會に屬する國民を満足せしめ得ざるのみならず他方政教分離を主張するセキユラー、エヂュケーションナリストの團體をも満足せしめ得ぬのであるから何時かは又此教育上の大問題が再燃せねばならぬ形勢になつてゐたのである。そこで今回の戦争は此問題に關して如何なる影響を及ぼすであらうかと云ふに、余は戦後の所謂

改造事業の最も重要なる一つとして、必ずや何等かの根本的解決を見ずには濟まぬであらうと考へる者である。純然たる政教分離は英國の國情に照して到底近き將來には行はれぬとしても、今日の制度よりも遙かに自由に公平なる方法が案出されて、宗派に關係なき宗教々育を施すやうになるであらうと察せられる。戦後の改造事業が此積年の難問題の解決を除外する氣支ひは有るまいと信するのである。

乍併、戦後と云はず既に戦争中の今日に於て、更に緊急なる教育問題として目下世人の注意を喚起しつ、あるのは、彼の教育對宗教の古い問題ではなく教育夫れ自身の改と云ふ新しい問題である。即ち戦争の教訓によつて英國國民は教育の方法其者を根本的に改善するの必要を認めつ、あるのである。此教育改革論者の主張する重なる要點は二つある、一は科學教育の必要、二は現代語學の必要是れである。

人物本位の教育と其一大缺點

由來英國の教育は大體に於て文學本位の教育であつて科學教育は其の附屬物たるに過ぎぬ

観がある。文學本位は言ひ換れば人物本位と云ふことになる、即ち紳士としての必要な教養を受けしめる爲め羅旬語希臘語を始めとして歴史文學等一般の文化に關する教授課程に最も重きを置き、實用的なる科學や近代語學の如きは幾分これを輕視する傾きがあつたとは事實である、勿論茲が英國の教育制度の一大長所であつて學生は學校に於て單に實用的知識を學ぶものではなく、寧ろ品性の陶冶紳士道の訓練を受くるを以て主なる目的としてゐるのである。一見すれば何事も實川主義を重んずる英國民にして斯かる教育法を行ふとは稍其國民性に矛盾する如く見ゆるであらうが、既に政治上經濟上世界の覇權を握つてゐる英國に取つては是れで澤山であると考へてゐたらしい。然るに今回の戰爭は俄然として其教育法の缺陷を自覺せしめた、科學的知識の缺陷は忽ち此戰爭に於て一大弱點を示したのである。何となれば敵國獨逸は科學的知識の普及に於て儘に英國より廿年も進歩してゐると謂はねばならぬ。勿論英國は歴代の偉大なる科學者を有する、科學上に於る發明創見の點に於ても決して獨逸に劣つては居らぬ。併し一般科學的知識の普及と云ふ點に於ては到底獨逸に及ぶべくもない。是は教育制度の根本的相違より來る結果であつて、今にして之を改革せざれば到底其の

世界的優位を維持することは出來ぬと云ふ點に漸く氣附き始めたのである。語學の點に於ても略同様である。由來國自慢の英國人程外國語の素養に乏しい者はない。各種の學校に於て佛語や獨逸語を教へぬではないが、皆極めて低度のものであつて單に社交上飾物たらしめる位のものである。實際英國人の佛語や獨逸語程まづいものはない。其發音の如きは多くは成つてゐない。是は言ふまでもなく、世界に於ける英語の勢力の多大なる爲め、餘り必要を感じぬからであらうが、今後更に英國民が世界に雄飛する必要があるとすれば、今日のやうな外國語の教育法では到底駄目である。羅旬希臘の死語に費す時間と責めては同じ時間を近代語の研究に費すやうにせねば、實用上到底物に成らぬと云ふのが論者の主張である。要するに目下最も盛に論ぜられてゐるのは、上記科學の普及と現代語の研究と云ふ事であるが、尙之に關聯して研究並に發明機關の設備とか文官登用試験の改正とか獎學資金の費途改良とか、其他種々なる提案が各々權威ある學會又は専門家によつて試みられつゝ、あるので、遠からず英國教育界に一大改革が行はれずには已まぬであらう。

以上の觀察を證明すべき事例の一つは故キツチナー元帥記念資金が既に三百萬圓以上に達

したので、委員は其使途に就いて近頃決議した所によれば、其元來の目的たる廢兵扶助の事業の外に此資金の一部を割いて之を青年の海外遊學費に充てることにした事である。而も面白い事には此獎學金は將來海外貿易に従事する志望の青年に與へると云ふ決議である。故名將の記念事業としての商業教育奨勵、茲に大なる暗示が潜んでゐるのではないか。お國自慢自尊自足の英國民は今や慥かに其眼を覺しつゝ、あると此一事でも分かるであらう。今一つの事例は近頃英國の諸大學に於て、盛に他國語の講座を新設するに至つたことである。就中露西亞語の研究は目下大流行であるらしい。倫敦大學には來春より愈々東洋語學部を開設し、露、印、支並に日本語の講座を設けられることになつた。パーミンガム大學やマンチエスター大學では既に開講してゐる。倫敦大學の日本語並に日本文化講師として不肖なる僕が既に推舉されてゐる。但し生徒の揃はぬ爲にまだ開講には至らぬが聽て教授を始める積りである。斯くして英國民は一面盛に有爲の青年の海外見學旅行を奨勵し他面外國語の研究機關を増設して戦後經營の機運に乗せんとしつゝ、あるのである。(一九一六、九、二八)

國民性の聖化

國家存立と自由擁護の戰爭

英國民は今や火と血の洗禮によつて愈々聖化されつゝ、ある。開戰當時より豫期された宗教的覺醒は國民全體の罪の自覺となつて現れて來た。

昨年は今頃迄の英國民は己が缺點を反省することを忘れたる自負自足の國民であつた。物質的文明の進歩と富の増殖の結果として國民は只だ安逸を貪り快樂に耽り如何にして一日を最も愉快に送らんかとのみ考へてゐた。勿論心ある人々は夙に此物質的傾向を慨いて之が警戒を怠らなかつたが、滔々たる多數人民は此世の利益と快樂の追求に没頭して、目に見えぬ精神界の問題などに對しては冷淡であつたと云つても過言でない。犠牲獻身の精神は少數人士を除いて殆ど地を拂ひ自己本位の實利主義のみが全盛を極めつゝ、あつたのである。

此時に當つて忽焉として有史以來空前の大戦亂が勃發した。太平に慣れ自由に酔つて殆ん

ど國家の存在をも忘れつゝ、あつた英國民は一朝にして國家の存立と自由の擁護の爲めに戦はねばならぬと云ふ責任を自覺するに至つた。勿論初めのうちは是れほどの大戦亂にならうとは豫明しなかつたであらう。英國は白耳義中立の擁護の爲めに己むを得ず刀の鞘を拂つたのであると思ふ位の事であつたらしい。併し一衣帯水の白耳義が一たび敵手に落ちた場合には英國は一日として枕を高くして眠ることは出来ぬのである。従つて自國の存立其物の爲めに戦ひつゝ、あると云ふ自覺は日を追ふに連れて段々明瞭に國民の腦裡に印刻されて來た。今では隣邦の中立どころの問題ではない、全く自國の安危存亡の問題となつて來た。道の自尊國民も是に至つて狼狽とまでは行かぬが聊か恐慌の氣味なきを得ない。

開戦以來殆んど一年にもならんとする今日に於ける大陸戰場の形勢は寸毫の樂觀をも許さない。白耳義は依然として敵軍の鐵腕に擱まれてゐる。佛國は其兵力國力の全部を擧げ盡してゐる。露國は豫期に反して到底獨塊の敵でない。伊太利の参加は英國外交の勝利を示してゐるが大體の戦局には左程の影響も及ぼさない。

各種の社會政策の進歩

是に於てか責任は愈々英國の双肩に懸つて來た。今となつては此戦争の勝つも負けるも一に英國の覺悟如何によつて定ると云ふ有様になつてしまつた。英國は明かに二重の責任を負うてゐる、一は自國の存亡に對する責任、二は世界文明の前途に對する責任である。

英國民の立場より見れば、獨逸の勝利は取りも直さず正義人道の顛覆を意味する、世界平和の破壊を意味する。のみならず國家其物の滅亡を意味する。奈翁戦争以來の一世紀間英國は未だ曾て斯くの如き國家的重大問題に遭會した事はない。實は今こそ英國に取つて容易ならざる危機である。

あれ程に熱狂した愛爾自治問題の鎮靜したのも此の大責任の自覺の爲めである。政黨間の休戦が行はれたのも之が爲めである。二百五十萬の義勇兵の應募を見たのも之が爲めである。而して政黨内閣の主義を一擲して、最近聯立内閣の成立したのも之が爲めである。其他自治自由の精神の極端に發達してゐる英國民として、到底平時に夢想することも出来ないやうな

政府の社會的並びに政治的施設が何等の反對もなしにすら行はれたのも全く之が爲めである。今一々之を列擧する邊はないが要するに各種の國家的社會政策は此戰爭を機會として實に驚くべき長足の進歩を遂げたのである。

國家的社會主義は或意味に於て英國國民の平素の氣性に最も適合せざるものであると云ふことが出来よう。然るに一たび未曾有の國難に遭遇して國家の安危が案ぜられる今日の場合となつては、國家の大目的を貫徹する爲めには何物をも犠牲に供して敢て顧みないと云ふ非常なる國家的觀念の發揮を示すに至つた。

個人主義の英國國民に愛國心の勃興

從來國家を以て單に個人の幸福の機關とのみ心得てゐた英國國民は、今や國家の存在の爲めには有らゆる個人の利益と權利とを抛棄するを辭しないと云ふ驚くべき愛國心の勃興を見るに至つた。固より英國國民には強い愛國心が有つたのである。夫れが平時には例のお國自慢と云ふ一種の自尊心として現はれてゐるに過ぎなかつた。

一方個人の權利思想と自由の觀念が非常に發達するに連れて其愛國心は何時しか強大なる個人主義の爲めに隠蔽されて一見英國國民には愛國心も國家觀念も無いかの如く思はれたのである。然るに事實は全く之に反して今や英國國民の愛國心は其の伏意識の位置より勃然として現意識の上ののぼり來つた。開戦以來全國國民の義勇奉公の行爲は之を證明し得て餘りある。平素餘りに愛國を口にしなかつた丈け夫れ丈け却つて愛國心の自覺は驚くべきインスピレーションとなつて國民全體を動かした、あるのを見る。犠牲献身の精神は社會の上下を通じて事の細大を問はず到る所に發揮されてゐる。開戦以來の社會人心の趨向を注意するに怠らなかつた余輩に取つては、此の献身的奉公心の勃興を目撃するほど大いなる感興はない。

獨逸の如き軍國主義の國家に於ては固より當然の事であつて何等の不思議もないのであるが、英國の如き個人主義の國、自由思想の發達せる國、自治の精神の旺盛なる國に於て、今日の如き舉國一致の愛國的行動を見ることは實に意外と云はねばならぬ。殊に個人本位の利害の觀念に敏き英國國民が其の強烈なる一身一家の利害の觀念を國家社會の爲めに全然抛擲し去つて毫も意に介せざる有様は實に千古の偉觀である。吾人は茲に英國國民の偉大を認めねば

ならぬ、其國民性の中に奥深く潜んでゐた或種の精神力に對して多大の尊敬を拂はねばならぬのである。

此精神力の果して何物であるかは人によつて解釋を異にするであらうが、余輩の見る所によれば、それは永き歴史を通じて知らず識らずの間に涵養され來つた宗教心の結果に外ならぬと思ふのである。

英國民の義務心と愛國心

山來英國民は義務心に富んでゐると云ふ定評がある。義務に忠實なるが故に今回の如き國難に殉ずるは當然であると斷定することも出来よう。併し更に一步を進めて其義務心の根柢が果して那邊に存するかを考へて見ねば成らぬ。一概に國家に對する國民の義務心と云はうか。余輩は前文に於て英國民が開戦以前まで殆んど國家的觀念なるものが無く、よし有つたにしても夫れは潜在意識のうちに葬られてゐたことを述べたが、是れは決して余輩の私見ではなく、英國の有識者の自白してゐる所であるから大抵間違はぬ觀察である。

既に國家的觀念の薄弱なる英國民の事であるから、愛國心が義勇奉公の動機であるとは見ることが出来ぬ。愛國心は勿論一種の義務心であるに相違ないが併し義務心が即ち愛國心であるとは謂へない。義務心は愛國心よりも其範圍が廣い。愛國心は一種の本能的感情に基づくものであるが、義務心は寧ろ其うちに醒めたる理性の要素を含んでゐる。

人間の理智の眼が開くに從つて本能的愛國心は自然に衰へる時が來るだらうが、覺醒せる義務の觀念は決して衰へるものではない、寧ろ理性の發達に連れて益々盛んになるものである。英國民は最早や單純なる愛國心によつて支配せられる時代を通過して、今少し根柢の深い理性の分子の多く加はつた義務心によつて動く時代に到達してゐる、言ひ換へれば英國民の愛國心は本能的若しくは感情的の愛國心ではなくして、覺醒せる義務の觀念に基づける道徳的若しくは理性的の愛國心である。

愛國心に果してさる二様の區別があるべきであるかどうかは姑らく倫理學者社會學者の研究に任せるとして、兎も角も日本國民の愛國心と英國民の愛國心とを比較對照して見れば其間に見遁しがたき區別が存するやうである。

或は純粹なる愛國心としては日本の夫れの方が優つてをるかも知れない。併しどちらかと云へば稍や盲目的本能に類してゐる日本式の愛國心は果して何時まで永續の見込みがあるかは大いなる疑問である。現に英國にも盲目的愛國心によつて動いた時代があつたのである。夫れが今では衰へてしまつて覺醒せる義務心によつて動く時代とはなつた。

國家萬能の時代より社會本位の時代へ

國家が萬事の萬事である時代は人類進化の一階程であるが決して最後の目的ではない。國家よりも更に廣義なる社會の存在を認めて國家的觀念以上に社會的意識を發揮し來るの時代が早晚到來せねばならぬのである。國家と社會との關係如何も複雑なる問題であつて容易に論斷は出來ないが概して云へば國家萬能の時代は今や漸く過ぎ去つて社會本位の時代に移り行きつゝ、あるのが世界の大勢であると云ふことが出來よう。略言すれば國家主義の時代は去つて社會主義の時代が來りつゝ、あるのである。

謂はゆる國家社會主義なるものは其中間の過渡時代に起るべき必然の現象である。試みに

英獨の二國を比較して見れば、概して獨逸は國家主義を代表し英國は社會主義を代表してゐると云つてよからう。勿論獨逸にも社會主義の勢力は旺盛である、寧ろ或意味に於て社會主義の本場であると云ふとも出來よう。併しながら國家の権力の強大なる點より見れば獨逸は到底社會主義を代表する國柄ではない。之と同時に英國にも有力なる國家主義者は有る、然り其國家の権力は意外に深い根柢を有する。儼然として世界の最大帝國として立つてゐる事實其物が何よりの證據である。併し乍ら民衆政治の本場たる英國、商賣本位の國柄たる英國に於ては國家の權威よりも社會の勢力の方が遙に旺盛であると見ることが寧ろ至當である。

ベンジャミン、キツドの言を假りて云へば『現在の優越』は國家本位の國に存し『將來の效果』は社會本位の國に存すると謂はねばならぬ。此見地よりすれば獨逸は今や國家主義の絶頂に達し其國家的権力が此先最早どうするとも出來ぬほどに膨脹して、其結果自ら其の皮殻を破つて新しき生命の進路を開かねばならぬ破目に陥つたものと云ふことが出來よう。

今回の戦争はつまり獨逸が其の緊張し切つたる實力のはげ口を附ける爲めに世界に向つて好んで戦を挑んだものに外ならぬ。譬へば腕力家が筋肉の緊張に堪へずして其の鐵拳を傍人

の頭上に見舞つたが如きものである。自國の發展の爲めに全世界の平和を破つた獨逸帝國が其の受くべき當然の報いを受くる日が來ることは何人も疑はぬ所であらう。

之に反して英國は其國家主義乃至帝國主義全盛の時代を無事に通過して、今や社會主義の時代に入りつゝある。社會本位の民衆主義は之を國家本位の軍國主義に比して、『現在の優越』を保つ上に於て幾多の弱點がある。就中戦争にかけては到底其敵でない、まるで本職の老手の前に未熟な素人が出たやうなものである。しかしながら、一國の運命が單に戦争によつてのみ決せられる、と思ふほど大きな間違ひはない。武器の戦争に勝つても平和の戦争に負ければ、國運の發展は斷じて期し得られぬ。社會の組織機關が人民の自治力と相伴つて、完全圓滿に運用するに非ざれば、如何なる戦争國も實に其戦争の効果を收めることが出來ないのみならず、却つて戦争其物が禍源となつて遂に邦家の前途を誤るに至るは、古今の歴史の證明し得て餘りある所である。(一九一五、七、一二)

戦時の英國宗教界

平和は第一善、戦争は第二善

英國戦時の宗教界には左したる變化も認めないが相變らず宗教的氣分は緊張してゐる。同時に英國の基督教會は國立教會と云はず自由教會と云はず、舉つて戦争の擁護に忠勤を抽んでゐる。或教壇などは餘り戦争熱を吐き過ぎるので聽衆の或者は厭氣をさして反對に平和の福音を説くクエーカー派の集會所に轉ずるものもあるやうである。慥に英國の教會は一種の矛盾に陥つてゐる。一方に於ては聲を限りに國民の罪惡を責め此戦争は則ち其非宗教的態度の神罰であるかの如く絶叫すると同時に、他方に於ては國民に向つて此戦争の正義の戦ひである所以を力説して其愛國奉公の精神を鼓舞せんと努めつゝある。戦争が罪惡の結果であれば戦争に依つて罪惡を償ふことは出來ぬ筈である。恰も血を以て血を拭ふやうなもので何時までたつても其傷口は淨められまい。戦争は罪惡の結果であり神の義罰であるが、この戦

争は罪惡でなく正義の戦争であるから飽まで勝利を博せねばならぬと云ふ主張の背後には、強烈なる國家的觀念が潜んでゐるので、謂はゞ戦争によつて勃發せる愛國心が正義人道の理想を閉塞せしめつゝ、あると見られぬでもない。

そこには明かに宗教と國家との妥協が認められる、戦争は罪惡であるが此世に戦争以上の大罪惡(?)が存する限り、小なる罪惡を以て大なる罪惡を防止せねばならぬ。平和は固より第一善であるが絶対の平和が未だ實現せられない今日の世界に於ては戦争は第二善として吾人の已むを得ず従事せねばならぬ所であると云ふ結局一種の諦め主義に外ならぬのである。此諦め主義は今に始つたことではないが、殊に此際に於ける英國民の多數の思想を支配して居る觀念である。英國民は、昔から決して抽象的理想の觀念に動く人民ではない、實際的現實の觀念に支配されて動く人民である。所謂『必要の論理』が何より有力なる動機であつて結局常識本位の國民である。此常識本位を離れて英國民を判斷する事は出来ない、高遠なる理想の追求の爲めに、現實の必要を無視して一直線に募進すると云ふやうな事は到底英國人に向つて豫期し得る所ではない。比較的理想の向上を任とする英國の宗教界が已むを得ざる罪惡

として此戦争を是認しつゝ、あるのも亦是れ已むを得ざるの成行であると謂はねばならぬ。

國家自衛と文明擁護の戦争

局外者から見れば種々なる矛盾も見出されるが、英國民の身になつて見れば、暫くこの矛盾を自覺しつゝ、も、先づ實行し得られる範圍に於て其最善を盡さんとする努力は、此際彼等に取つて残されたる唯一の道であらう。第一に、國家其物が存亡の危機に瀕してゐる、第二に、文明の前途が此戦争の勝敗によつて定まらんとしてゐる。國家自衛の戦争が若し正義の戦争であるならば、文明擁護の戦争は更に一層明白なる正義の戦争であらねばならぬ。英國民は遂に此の二個の正義の觀念に動かされて、已に四百萬の義勇兵を出し、已に五十萬の死傷兵を出し、已に二百の戦費を負担し、又現に毎日五千萬圓の國帑を費しつゝ、あるのである。人と金との犠牲のみならず、其の最も誇りとせる義勇兵制度さへも拋棄して、一部の徴兵制度を採用した。數百萬の職工より成る勞働組合は、其唯一の武器たる同盟罷工の權利を拋棄して、戦争中軍需法案の下に支配せられるを甘んじた。過去百年間未だ曾て有らざりし聯立

内閣を組織して、其政黨政治の根本主義を抛棄した。更に又近き將來に於て或は其の歴史的なる自由貿易主義を抛棄して、或種の製造物に對する保護關稅の制を採用せんとする勢ひをさへ示すに至つた。

必要の論理は英國國民性の自然の發露

今回の徴兵制は未婚の避忌者に對する一種の制裁法たるに過ぎず、従つて實際此法令の下に曳き出される徴兵の数は極めて少數のものであり、英軍の最大部分は依然として挺身自ら進んで國難に殉ぜんとする義勇兵より成るものであることは何人も認めねばならぬ所ではあるが、併し主義の上から見れば明かなる自由主義の抛棄である。唯の一人たりとも此法令の力によつて軍隊に加入せしめられたとすれば、義勇兵制度は同時に破棄されたものと見ねばならぬ。其他前に列擧したる労働組合の事、聯立内閣の事、保護貿易の事、一として今より二年前までは何人も夢想だになし得ざりし大變化である。或意味に於ては此大戰爭により英國國民は其根柢より其國民性を一變しつ、あると謂つてもよからう。斯くの如き大變態、斯く

の如き大革命は、善かれ悪しかれ悉く此戰爭の生み出した產物であつて、英國の歴史に永く拭ふべからざる一種の刻印を捺すものであるに相違ない。而して、是れ皆な「必要の論理」の然らしめたるものであつて、つまりは理想よりも實際を重んじ、主義よりも義務を重んじ、論理よりも常識を重んずる英國國民性の自然の發露であるを思へば、表面に現はれた幾多の驚くべき變化も今日の場合敢て異とするに足らざることを悟らねばならぬ。要するに自衛の戰爭正義の戰爭で根本觀念が斯かる臨機の大變革を容易に實現せしめたのである。吾人は斯かる有形並びに無形の大犠牲を敢てしてまでも、此の戰爭の最後の勝利に向つて國力を傾盡しつ、ある英國國民に對して多大の同情なきを得ない。個人としても國家としても非常の場合には非常の覺悟を要する、多少の矛盾や自家撞着は此場合英國國民に對して吾人の恕してやらねばならぬ所である。華々しき理想の煥發は吾人之を英國國民に望むことは難いが、堅實なる義務の遂行は吾人之を英國國民に學ぶ所なくてはならぬ。

精神界の志士と其勢力

乍併英國にも理想家が無いではない。英國の思想界はベンザムやミルやスペンサーばかりではなくカーライルやケアードやグリーンやブラッドレーをも出してゐる、キプリングやバーナード・ショウが如何に聲を濁らしても其感化は到底ワーズワースやテニソンに及ぶべくもない。英國人はピットよりもグラッドストンを、ウエリントンよりもゴルドンを、セルロージよりもリヴィングストンを尊敬してゐる。封建時代の騎士の面影や自由と信仰の爲めに奮闘した清教徒の氣風が今尙ほ英國民の間に遺つてゐる。自由平等正義人道の爲めに身命を捧げて顧みない精神界の志士其人決して少いとせない。過去に於て然りし如く今尙ほ然りである。現に此戦争に際して基督教の立場から堂々非戦論を唱へ殊に徴兵反對論を唱へて一代の輿論に反抗しつゝある宗教家の存する一事は吾人の大に注意すべき事である。ウイリアム・オーチャード、リチャード・ロバーツの如き孰れも其中心人物として看過しがたき勢力を有してをる。ロバーツ氏の如きは昨今まで倫敦郊外クラウチ、ヒル組合教會の牧師として著しき成功を奏しつゝあつたが其非戦論の爲めに會員と合はずして之を辭し、今は専ら例の『國際輯睦同盟』の幹事として随分目覺しき活動をなしつゝある。會員も既に三千五百人に

達してゐる。余は直接同氏を知つてゐるから特に彼を挙げたのであるが思ふに彼れの如き立場に立つてゐる少壯有爲の牧師其數決して少しとせぬであらう。殊に注意すべき點は彼等と行動を共にする非戦論者の多數は青年男女である事である。中には多數の神學生あることは余の曩に報道した通りである。此團體と間接直接に氣脈を通じて活動してゐるものには秘密外交に反對する『民衆統治同盟』あり、政黨としては『獨立勞動黨』あり、宗派としては『クエーカー』あり、彼等は必ずしも凡ての點に於て一致するものではなく、其の動機も必ずしも同一ではあるまいが、其非戦論就中非徴兵論に於ては全然一致してゐる。今回の徴兵制度に極力反抗しつゝある『非徴兵同盟』は別に一個の會を組織してゐる譯ではないが、自然に此等の種々なる團體の會員等が無形の同盟を形造つてゐるものと認められる。近頃彼等の集會は大抵聽衆の妨害によつて中止となり勝ちである。過日英國組合派の本部たる『メモリアル・ホール』で催された集會の如き激怒せる聽衆によつて辯士は演壇より引き落され窓硝子は破られると云ふ大騒動を演じたので、爾來同本部では其會館を此團體に貸さぬことにした。

非戦主義者必ずしも非國民に非ず

言ふまでもなく彼等は一世の風潮に逆行しつゝ、あるのである、國民の大多數は勿論彼等に反對である。併しながら如何に少數たりとも此團體には侮りがたき勢力がある、就中『國際輯睦同盟』と『クエーカー派』とは共に其主張の根據を其宗教的良心に置くのであるから政府も是れには大いに閉口してをる。今回の徵兵令に良心的反對者を直接兵役より免除せる一項を加へたのは斯くせねば納まりがつかぬ爲である。彼等は裁判廷に於て其良心の命ずる所を聲明しさえすれば夫れで兵役から免除される譯である。之れは獨りクエーカー派の會員に限らず何人でも其の良心の禁ずる所を行ふこと能はずと斷言すれば國家は之に對して強ひて兵役に服せしめる權能はない。唯だ此場合政府は直接兵役以外の或種の國家的勤務に従事せしめることは出来る。例へば掃海の如き救護の如き其の重なる仕事であらう。勿論極端なる非戦論者は此等の間接事業にも反對するであらう。苟くも戦争に關係ある仕事には一切従事せずと云ふ論者も少くはあるまい。併し余の見聞せる所によればクエーカー宗の人々のうちに

すら赤十字事業の如き戦争中の人道事業には敢て反對せぬ者が多數のやうである。されば投獄されても一切の戦時事業を拒絶する者は極めて少數ではなからうかと思はれる。兎も角も戦場に立ちて同胞殺戮の罪惡を犯すを肯ぜざる所謂非戦主義者は恐らく何萬を以て數へるほど多數であらう。彼等は必ずしも非愛國者ではない、斯くするのが最高の愛國的行動であると信じてゐるのである。國家の命令以上に良心の命令を重んずるのが眞正の國民であると確信してゐるのである。此處に彼等の犯すべからざる權威がある。英國人の常識主義より見れば如何にも偏狹に思はれるであらう、併し詐らざる良心の自由を尊重すべく教へられたる英國人は彼等を目するに非國民とか賣國奴とかを以てすることはないのである。相當の尊敬を拂つて彼等に特別の取扱を與へんとするのが輿論の要求である。今回の徵兵令は彼等に對する除外例を設けることによつて其最も力強い反對論の鋭鋒を免れることが出来たのである。(一五二六、一七)

歐洲文明と基督教

三人の王者が基督降誕に禮拜を捧ぐるの圖

目下冬枯の倫敦に於て奇しくも滿都の人目を惹きつけつゝある一枚の繪畫がある。中立國たる和蘭の諷刺畫家レーマーカーの筆になるもので、三人の王者が基督の降誕に禮拜を捧ぐるの圖である。構圖と云ひ、色彩と云ひ、申分なき出來榮えて殊に時節柄一見觀客をして快感を催さしむるものである。然しながら人若し近づいて具さに此繪を凝視するならば彼れは恐らく一種の戰慄を感じずには居られぬであらう。三人の王者は爆彈を手にする獨逸皇帝と大砲を捧ぐる奧國老帝と鮮血淋漓たる短劍を提げた土耳其皇帝とである。彼等は往昔東方の三博士の如く今や來つて神の子基督の足下に禮拜を捧げつゝあるのである。幼き基督は言ひ知らぬ嫌惡と恐怖の顔貌を以て戰慄しつゝ、聖母の懷に其顔を隠さんとしてゐる。ああ是れ何たる深酷の諷刺畫ぞや。聯合軍側に好意を抱けるレーマーカーの筆に成るものであるから茲

には獨逸土の三王者のみしか描いてないが、畫家にして若し此三人のみならず更に英佛露伊等の王者をも之に加へたならば諷刺は更に一層深酷の度を極めたであらう。今や沒藥芳香金玉の代りに有らゆる武器を齎して基督の足下に跪拜する者、決して單に獨逸土勃の同盟國のみではない。同じく基督教國たる聯合諸國も亦同じ禮拜を捧げつゝあるのである。天父の聖旨に背き基督の教訓に戻りて同胞殺戮の大罪を犯しつゝ、ある點に於ては敵も味方も同罪である。歐洲戰爭の真相は餘蘊なく此一幅の諷刺畫によつて曝露せられた。此繪畫を一見して誰にも直ちに起り來る問題は「歐洲文明と基督教」にあらすして果して何であらう。

人道の存亡宗教の死活問題

「至高處には榮光神に在れ、地には平和、人にも恩寵あれ」てふ天使の音樂は此のクリスマスにも幾億萬の基督教徒に依つて唱和された。而も同時に殷々たる砲聲は歐亞の天地に轟いてゐた。せめてはクリスマス當日だけでも休戦を實行したいと云ふ希望は、此度は實現されなかつた。一昨年のクリスマスには非公式ながら到る處の戰線に於て自然に休戦が行はれ、

敵味方の兵士は塹壕の中から出て互に握手交歓し紀念物を交換して別れたと云ふ物語はある。併し今度のクリスマスには彼我共に之を嚴禁したもろしく絶えて其噂を耳にもせぬ。耳にせぬのが寧ろ當然である。戦争は遊技ではない、もつと眞面目な嚴肅な仕事である。互に神と人との前に大罪を犯しつゝ、あるのである。クリスマス當日の休戦の如きは感情的なる宗教家にとつては幾分意義ある現象かも知れぬが、少しく事物の根柢を考へる者に取つては全然無意義である。斯かる事の行はれたのはまだ眞面目に戦争と云ふ者の意義を解せず軍人としての使命を重んぜざるの結果である。若し戦線の兵士にして眞實に基督の降誕を祝し其の誠命に忠ならんと欲せば彼等の取るべき途は唯だ二つある、一は武器を棄て、戰場を去り軍法會議に附せられても其の非戦主義を貫徹する事、二は決死隊を組んで敵陣に突貫し火と血の洗禮を浴びて首尾よく犠牲の死を遂げる事是れである。前者は基督の教理の非戦主義を信する者の當さに執るべき態度であり、後者はクリスチャン兵士の本分を重んじ此際邦家の爲め人道の爲め其主の十字架の跡を追はんと覺悟する者の當然執るべき態度である。クリスマスを年中行事の祭日と心得て暢氣に休戦するが如きは眞摯なる軍人の爲すべき所ではあるま

い。現に一昨年のクリスマス休戦にも彼我の兵士が別れて塹壕内に入るや否や再び砲火を交換したと云ふが如きは不自然も亦極まれりである。戦線に立つても救世主の降誕を忘れぬと云ふ心事は幾分同情の涙に値せぬでもないが要するに問題はまだ徹底して居らぬのである。大體基督の教訓に背いて戦争と云ふ大罪惡を行ひつゝ、局部の休戦を以て其主の降誕を祝せんとする如きは寧ろ滑稽に類する兒戯である。言稍や過激に失してゐるかも知れぬが根本的に戦争と基督教の問題を考へつゝ、ある者に取つては今回休戦の噂を耳にせぬ事が却つて一種の満足である。少くとも交戦國民が稍や眞面目に此戦争の意義を解し自己の本分に忠實ならんことを期しつゝ、あることを示すものである。今や世界は空前の大禍亂に陥つてゐる、文明の消長、人道の存亡、宗教の死活問題は一に戦争の成行如何に依て定らんとするの危機に際して居る。人類歴史上實に容易ならぬ大時期である。歐洲の人民が或は文明の破産を呼び基督教の失敗を以てするのは決して無理ではない。

歐洲文明は自殺的文明

しかして斯かる叫びが單に一般民衆によつてのみならず、世の有識者就中基督教界の先覺によつて發せられつゝ、あるは最も注意すべき事柄である。

過日ホルトン博士は「戦後の世界」と題して歐洲文明を自殺的文明なりと斷じ、若しも斯かる自殺的文明が繼續して今度の戦争の如き大戦争が二三次も繰り返されるならば歐洲の天地はやがて斯かる自殺的文明を有せざる黄色もしくは黒色人種によつて占領せらるゝに至るであらうと論じたのは、慥に豫言者の獅子吼である。國立教會の一指導者たるテンブル氏は「基督教と戦争」と題する小冊子の劈頭に「異教化せる世界に於て基督教者は何を爲すべき乎。

世界は慥に異教化せり、基督の肢體は相互に裂き合ひつゝ、あり、主の體はカルバリーに於けるが如く流血淋漓たり、而も今や其傷は主の弟子によりて與へらる。恰かもペテロが釘を打ち込み、ヨハネが脇を刺しつゝ、あるが如し」と唱破してをる。孰れも激越の言ではあるが、事實は慥に其通りである。

併し乍ら基督教者は果して失敗したのであらう乎。余は斷じてさうは思はない。世界の人類が基督教の理想を實現するに於て失敗したのであつて、基督教が失敗したのではない。實は

基督教以外の物は悉く失敗したのであつて、人類の大理想たる基督教は依然として嚴存してゐる。基督教の無力を叫ぶ心其物が基督教の理想の實現を希望し已まぬ無限の憧憬心ではないか。基督教が自己の無力を自覺し來つたのは其内に潑刺たる生命の存してゐる何よりの證據である。死者には不満を訴ふる力もないのである。のみならず余の最も奇異に思ふ事は歐洲の大戦争は決して今回のみに限らず、而も其多くは矢張り基督教國と基督教國との戦争であり、且つ慘澹たる宗教戦争すら多くあつたに拘らず、獨り今回に限りて此の叫びが斯くも聲高く聞ゆると云ふ事である。是れは慥に人心が物質的文明の迷夢より覺めて精神的に大なる覺醒を來しつゝ、ある證據であると思ねばならぬ。歐洲の人心は自己の文明に對して深刻なる不満を感じ、是れではならぬと云ふ觀念が猛烈に起つて來たればこそ、斯かる純叫を發しつゝ、あるのである。彼等は從來の文明に失望し何等かの新文明の出現を絶對の必要と認めつゝ、あるのである。必要は議論よりも有力である、物質的文明の破産を目標せる歐洲國民は其自然の必要上精神的文明の實現に向つて其全力を傾盡するに至るであらう。是れは余の信仰である、期待である。濛々たる戦塵のあなたに確かに一道の光明を認めることが出来る。

歐洲文明は異教主義と基督教主義の混合物

去り乍ら事實は飽までも事實である、余の觀る所によれば歐洲の文明は決して理想的の文明でない。歐洲の基督教も亦決して理想的の發達を遂げてをらぬ。現代の歐洲文明は依然として異教主義と基督教の混合物である。基督教は未だ異教主義の上に勝利を占めて居らぬ。異教主義を征服したる如く見えて實は却つて之れが爲めに征服せられたる傾きがある。恰も羅馬が希臘を征服して却て希臘化せられたる如く、基督教も羅馬帝國を教化して却つて希臘羅馬の異教主義の爲めに其本來の面目を失つた。殊に羅馬帝國の國家主義と妥協を試み、基督の所謂「此世の國」と「我國」とを混同するに至つて純然たる基督教の特性は失はれた。天主教會は會て大膽にも其神權を以て國家を支配し一種の神政々治を地上に行はんとしたが、基督教本來の性質に矛盾する企てであつたが故に遂に失敗した。ルーテルの宗教改革は羅馬教會

の腐敗を刷新するには幾分の効果はあつたが、舊新兩教は各々其國家と結んで遂に彼の三十年戦争の如き悲劇を演じた。「神の國」を人類の靈性の上に建設すべき基督教は誤つて異教主義の權化たる國家の力によつて之を地上に實現せんと努めた。茲に大なる誤謬がある。政權を利用せんとせる基督教會は却て之が爲めに利用せられて、宗教は恰も政治の機關の如く、教會は國家の奴僕たるが如き奇觀をさへ呈するに至つたのである。

神の國と此世の國

已に國家の存在を神意に基づくものと認めたる以上、其國家の存立に必須なる戦争を是認するに至るは當然の成行である。是れは保羅以來代々の教父神學者の同じく陥つた誤謬であつて、教主たるナザレのイエスの宗教を距ると甚だ遠いものである。イエスの宗教は靈的王國たる「神の國」の實現に在つて、其「神の國」は超國家的なる人類の心靈的王國である。國家民族言語人種の差別を超越せる人類共通の精神的社會是れがイエスの「神の國」である。イエスの福音は此「神の國」の宣傳に外ならぬ。イエスの眼中には國家もなく民族もなく唯だ人類

同胞あるのみであつた。基督教は決して政治と妥協すべきものでない、國家の使命と基督教の使命とは全然別物である。一は有形の王國であり他は無形の王國である、まるで存立の範圍が違ふ活動の領分が違ふ。個人々々の靈性の中に神の國を築き上げる事により世界人類の間に神の子等の社會を建設するのが基督教の目的であり存在の理由である。勿論宗教の感化が國家の道德を高めることはあらう、政治の運用を助けることはあらう、而も是等は結果であつて目的ではない、目的は國家民族を超越せる人類全體の救拯にある。

然るに過去二千年間の歐洲の基督教はイエスの「神の國」の眞義を取違へて異教主義の提灯持をした嫌がある。現代の歐洲列國は其名を基督教國と呼ぶと雖も實は基督教の衣を着たる異教國である。政權と武力によりて其存在を保つてゐる所謂「此世の國」である。個人たる基督教徒は澤山あつても基督教國は一つもない。又其様なものが有るべき性質のものではない。眞個のクリスンドムはキングダム、オヴ、ゴットである。國家を最高至上の實在と認める政治と「神の國」を終極の目的とする宗教とは到底一致すべき性質のものでない。之を無理に一致せしめんとしたる所に歐洲基督教の病根があり、一切の誤謬がある。斯かる基督教はエ

ソウの昔譚の如く一杯の羹の爲めに長子の權を賣つたものである。余が歐洲の基督教を以て理想的の基督教にあらずとなすのは、必ずしも其感化力の未だ不充分なるを以てでない。其根本主義に於て誤れる「神國觀」の上に成り立つてゐることを認めるが故である。歐洲の基督教が此の根本の誤謬を悟つてナザレのイエスの宗教に立ち戻り、其全力を靈的王國の建設擴張に傾注するにあらざれば、到底理想的の發達を遂げることは出来ぬと信ずる。異教主義と妥協せる基督教は似而非なる基督教である、其失敗は當然の運命である。

基督教は人類靈的生命の大潮流

乍併基督教は永遠の勝利者である。眞個の基督教は未だ不幸にして歐洲の天地には實現されて居らぬが、左りとて其前途を悲觀すべき謂はは毫もない。基督教は人類靈的生命の大潮流其物である、人道の理想其物である。歐洲の基督教は其幾多の過誤失敗を演じ來つたに拘らず文明の進歩人道の發揮に貢獻したることは昭々乎として明かである。未だ全く異教主義を征服することは出来ぬが已に個人の靈性の上に於ては勝利者たる位置に立つてゐる。残る

は國家の生命を如何にして救ふかの問題に在る。國家は異教主義の最後の足場である。個人間の道徳は基督教の感化によりて已に確立した。只だ國家間の道徳は未だ極めて幼稚の程度に在る、否殆んど皆無と云つてもよい。國際關係の完全なる調攝即ち世界の平和は人道の進歩が今一段の高きを加ふるにあらざれば到底實現せられない。國家を最高至上の實在と信する政治思想が人心を支配する間は、戦争は恐らく其跡を絶たぬであらう。然も世界の大勢より見るも、文明の歸趣より見るも、人道の進歩より見るも、此思想は決して終極の思想ではない。超國家的人類の社會は著々として實現の歩を進めつゝある。經濟上にも政治上にも道徳上にも此機運は駸々乎として到來しつつある。イエスの所謂「神の國」の理想は、決して一片の空想ではない。社會學上の不動の原理である、茲に將來の基督教の新生面は開かれねばならぬ、歐洲の基督教が覺醒一番イエスの宗教に立戻つて此「神の國」の實現に努力すべき時機は到來した。歐洲の基督教徒が果して此の根本問題に開眼し初めたかは余の未だ保證し得ざる所であるが、少くとも世界の氣勢が彼等をして早晚茲に想到せしめるであらう。余は今回の大戦争が基督教の爲めに新紀元を劃すべきを信じて疑はぬ。若夫れ歐洲の基督教徒が

其教主の理想を實現し得ざるに於ては、東洋の基督教徒は彼等に代つて之を成就せねばならぬ。基督教は西洋の専有物ではない。天地は悠々、人類の前途は遠い。吾人は「神の國」を過去に見ずして將來に望む者である。(一九一六、二、五)

改造の歐洲より終

大正九年六月廿八日印刷
大正九年七月五日發行

【定價圓五拾錢】

不許複製
改造の歐洲より

著作者	加藤直士
發行者	增田義一
印刷者	渡邊八太郎

東京市京橋區南紺屋町十二番地
東京市生込區櫻町七番地

發行所

實業之日本社

東京市京橋區南紺屋町十二番地
電話八七四、八七五、八七六、九八九
郵便振替貯金口座三一六



□碧巖錄講話 上下再版 黄樂宗管長 高津柏樹老師講述

價各貳圓五十錢

□祖國を顧みて 十四版 法學博士 河上肇先生著

郵稅各十二錢

□國際聯盟の解説 再版 法學博士 蜷川新先生著

定價一圓廿錢

□縮刷 修養 一七版十 農法學博士 新渡戸稻造先生著

定價一圓廿錢

□縮刷 世渡りの道 六三版十 農法學博士 新渡戸稻造先生著

定價一圓五十錢

□自警 十版 農法學博士 新渡戸稻造先生著

定價一圓廿錢

□一日一言 七四版十 農法學博士 新渡戸稻造先生著

定價一圓四十錢

□縮刷 青年と修養 十八版 實業之日本社長 増田義一著

定價一圓五十錢

□生活戰術 八版 法學博士 浮田和民先生著

定價一圓五十錢

□安價節約 新生活 法四版 醫學博士 額田豐先生著

定價一圓三十錢

□奮闘主義 八版 男爵 森村市左衛門翁述

定價一圓二十錢

□努力 六版 男爵 大倉喜八郎翁述

定價一圓八錢

□意志の力 十版 安田善次郎翁述

定價六十五錢

□鍊膽術 三二版十 永平寺管長 日置黙仙禪師述

定價六十五錢

□簡易生活の實例 再版 西村文則先生著

定價九十六錢

□心得て居らねばならぬ 社交禮法 六版 外務書記生 熊吉先生著

定價九十六錢

縮刷 社會と自分 第十版 故夏目漱石先生著 定價一圓五十錢 三六判總布

小説 海へ 七版 島崎藤村先生著 定價一圓十錢 四六判美才

長篇小説 靈鐘 卷上 四版 小杉天外先生著 定價貳圓五十錢 郵稅十一錢 四六判木版表裝

家庭小説 銀笛 下上 九版 小杉天外先生著 定價各二圓十錢 郵稅各八錢 四六判美木

俳句とはどんなものか 卅版 高濱虚子先生著 定價六十錢 郵稅四錢 四六判美木

俳句の作りやう 卅版 高濱虚子先生著 定價六十五錢 郵稅四錢 四六判美木

戲曲訂法 難 四版 文學博士 坪内逍遙先生著 定價貳圓卅錢 郵稅八錢 四六判美木

淨瑠璃に現はれた女 の情操 四版 新公論編輯長 島中雄三先生著 定價一圓八十錢 郵稅八錢 四六判總布

常識教科書 知らぬと耻 十六版 樋口麗陽先生著 定價壹圓 三六判總布

易の原理と其應用 五版 法學士 細貝正邦先生著 定價一圓十錢 郵稅六錢 四六判總布

大隈侯百話 四版 江森泰吉先生著 定價一圓八十錢 郵稅十八錢 菊判總布

處世術修養 再版 江口岳東先生譯 定價一圓二十錢 郵稅十二錢 菊判總布

蓮聖地巡禮 三版 一高澗洽會編 定價一圓五十錢 郵稅十二錢 三六判總布

ルースヴェルト全集 五版 山崎梅處先生譯 定價壹圓 菊判總布

世界改造の人々 再版 文學士 伊東圭一郎先生著 定價一圓三十錢 郵稅八錢 四六判總布

内觀的研究 再版 農學博士 玉利喜造先生著 定價八十錢 菊判總布

□改訂 増補 新しい言葉の字引 七三版十 前早大講師 服部 嘉香先生著

□笑ひながら 正式の算術 十第 二版 中村 八郎先生著

□笑ひながら 中等算術 下上 五版 中村 八郎先生著

□實用 術 第三 十版 西脇 吳石先生著

□作法 文範 書翰文 大 全 五 版 高 関 根 正 直 先生著

□複利 増進 資金運用論 卅 版 與 栢 奎 太 郎 先生著

□投資物の比較研究 十二 版 小 川 鐵 堂 先生著

□經濟記事の讀み方 八 版 十 細 貝 正 邦 先生著

□性慾研究と精神分析學 十 四 版 柳 保 三 郎 先生著

□改訂 増補 岡田式靜坐法 百 六 版 實 業 之 日 本 社 編

□訂正 増補 衛生十二ヶ月 卅 版 櫻 田 十 次 郎 先生著

□體力精力増進法 卅 二 版 櫻 田 十 次 郎 先生著

□腎臓炎と糖尿病 四 版 菊 池 林 作 先生著

□腦 の 衛 生 十 三 版 櫻 田 十 次 郎 先生著

□胃 腸 の 衛 生 十 版 野 田 太 市 先生著

□藥になる 食物と病人の食物 四 版 衛 生 新 報 社 長 伊 藤 尙 賢 先生著

定價 一圓 二角 郵 稅 六 錢

定價 各 九 十 錢 郵 稅 各 冊 六 錢

定價 七 十 錢 郵 稅 六 錢

定價 一圓 八 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 九 十 錢 郵 稅 六 錢

定價 一圓 卅 錢 郵 稅 六 錢

定價 一圓 卅 錢 郵 稅 六 錢

定價 一圓 卅 錢 郵 稅 六 錢

定價 一圓 二 角 郵 稅 十 二 錢

定價 六 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 六 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 五 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 九 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 六 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 六 十 錢 郵 稅 四 十 錢

定價 一圓 二 十 錢 郵 稅 六 十 錢

本社二十週年紀念出版 英傑傳叢書 愈々發賣熱狂的大歡迎

□偉人の言行は以て吾人に發奮の動機を與へ、英雄傑人の事蹟は□
 □以て時代の背景を語る、本叢書は是れ實に出版界の一大驚異也□

ワシントン 再版 矢代文學士 井上文學士

ビスマルク 絶版 法學博士 蛭川新

ルーテル 絶版 マスター・オブ・アーツ 村田勤

クロンウェル 既版 慶大教授 戸川秋骨

ペー トル 既版 早大教授 昇曙夢

ナポレオン 再版 ドクトル・オブ・ファイナンス 長瀬鳳輔

フレデリキ 既版 文學士 煙山專太郎

リンコルン 再版 文學士 内崎作三郎

カヴール 既版 文學士 阿部秀助

ネルソン 未刊 法學博士 平沼淑郎

少ピット 未刊 永井柳太郎

グラッドストーン 未刊 文學士 小山東助

□全部十二冊 定價各冊二圓 郵稅各冊十二錢 菊判總布大冊美本
 □津田青楓畫伯裝幀全部十二卷前金直接御注文の方限二十圓送料不要

384
218

9.10.4

終